

近江源氏先陣館

座本 竹田新松

地あらずの奉立ちそめて御園には。木々も緑の四方の波。ホッレしづけき君が御代とかや。地されば右大将頼朝公。驅る平家を西海に切鎖め。源氏一統の御威風。儼草の鎌倉御所。オロシへ太平の地を。占め給ふ。地時は建仁三年正月元旦の御壽。二代の君右大臣實朝公。立烏帽子に緋の御装束。白書院に出で給へば。上段には龍頭の兜を飾り御母公政子の御方。武將の祖父北條相模守時政公。先君頼朝より天下の執權を預り孫君の御後見。御年配も六十餘州自然と握る三つ鱗。其外關八州の大小名。烏帽子素袍もさいめきて。袖を通ぬる大廣間。フシ御盃の大流小流。コヘ縁側には猿樂の役人祝儀の閉口相勸

め。誦は老松ナホス梅が枝に。弓矢立合弓取のフシ列を。正して出勤ある。地こゝに近江源氏の嫡流。佐々木三郎兵衛盛綱御前近く召出され。實朝仰せける様は。詞其方儀は親源藏秀義より二代の家人。ことに近年忠勤を擲んで勤功他に超えたり。従つて近江の國は。元其方が故郷なれば一國をあて行ふ間。江州へ赴き一圓に領知致すべしと。地御説の趣承り。謹んで平伏し。詞不功の某身に餘る御恩賞有難く存じ奉る。但し一つの御願ひ。某が弟佐々木四郎左衛門高綱兄弟共に先陣を相動めしに。弟高綱に御恩賞なかりしかば一徹の生れ付き。恐れながら先君を恨み奉り。且は兄の某にも遺恨を挟み。

十箇年以前鎌倉を出入して行方知れず。あはれ此度の序に弟高綱が在所を求め召出され。地江州の内にて分地拜領なし下され候はゞ。猶此上の君恩に候はんとして恐れ入つて言上す。地北條殿亮商と打笑み。詞尤もの申條さりながら。此度御邊を江州へ遣はすは謀あつての事。其故は先君頼朝薨去の後。嫡男ながら左中將頼家卿懦弱の生れ付故に。舍弟實朝に武將を超えられしを心外に思ひ。鎌倉を立去つて京都へ引つこみ。早や三年。此頃聞けば謀叛の催しあるとの風聞。江州は京都五畿七道の境。關を固めて東國の軍勢を防ぐ用意ありと様々の噂。御邊の器量を見立て江州へ發向さするは。此方より先を取つて京都を抑ゆる謀。中にも其方が弟佐々木高綱は。軍法の奥義を極め。陳平張良にも劣らぬ勇士。行方を尋ね佐佐木兄弟。地江州を固める用意肝要なり

と。ありければ。詞ハ、ア畏り奉る。地弟高綱兄弟心を一致にせば。たとへ如何なる大敵も暫時のうちに取控ぐは。方寸の内に入り御賢慮安く思さるべしと。お受けの詞に政子の方。御墨付を給ひければ。盛綱三度頂戴し。時の面目身に施し。オケリ御前をへ立つて退出す。地折ふし廣間に案内して。詞京都頼家公より御禮の使者參上と相述べれば。地それ待ち兼ねつ早やこれへと仰次第に言ひ傳へ。鎌倉の附家老片岡造酒頭春久。京都の近習比企判官官員。遙下つて小姓立の若侍三浦之助義村。十八歳の角前髪諸士に式禮衣紋の著振性ず慮せぬ一器量。フシ人に勝れて見えにける。地時政御覽じ。詞年頭の祝儀早速の參著満足せり。併しながら此頃心得ぬ人の取沙汰。殊に頼朝御他界の後京都へ退き。度々使を以て鎌倉へ請待すれども。今に於て下向なく。酒宴遊興に日を

送らるる、放埒の振舞。片岡を附け置く上は。など諫言も致さずや。これなる武將實朝は我が孫。祖父時政天下を後見する上は。武將同然の時政を。侮り輕んじ申さるゝ頼家の心腹。それに従ふ諸士の胸中旁以て心得ずと。地凛然たる嚴命に。恐れ入りたる造酒頭。心を察し政子の方。詞人の噂を取上ぐれば。天道の事迄も恨み羨るは下々の習ひ。わけて頼家は自らと繼しき中。故殿頼朝様の愛妾宇治殿の腹に生れ給へば。地妾に隔もある様に人の云ひなし。鎌倉を狙ふの御謀叛のと。由無し言を聞くたびに自らが胸の苦しさ。推量せよ。ヌエ片岡と。仰にはつと頭をあげ。詞我等儀は鎌倉より京都に添へ置かるゝ附家老。いづれに詔ひ。いづれに偽りを申上ぐべき様もなし。頼家公鎌倉に御下向なきは。素より多病の御生付。御殿を離れ御他行だに稀なれば。御疎遠の段はさし

て趣意ある事にあらず。實朝公時政公兩將に對して。恨み給ふ御心毛頭なし。地御謀叛などとの雜説恐ろしく。身持放埒の御咎め噂に違はぬはこれ一つ。詞若狹と申す白拍子を殊の外御寵愛なされ。愛妾に引上げられ。夜晝わかず酒宴の興。たつてお諫め申せども一切お用ひこれなき故。人の惡説を重ぬるも。元は好色の御過り。これとても若氣の習ひ。御齡だに長じ給はゞ自ら改まらん。地此儀は我等に御預け。冀ひ奉ると。事を飾らぬ申し條。比企の判官進み出で。詞イヤ／＼頼家公に御謀叛の心。全くないとは言はれまい。正しく頼朝の御惣領を差置き。時政公指圖として。孫の實朝公を武將に立て。祖父君の後見は自然と四海を手に握る。北條殿の計ひと疑ひかゝりし宇治の方。頼家公御親子の心。餘り無理とも存せぬと。地百三寸で内はから比企がフシ

底意ぞ。訝しき。地聞き兼ねて造酒頭。御前をも憚らず尾籠の詞。アレ見よ上段に飾り置かれし兜こそ。源家の重寶龍頭に鉄形打つたるは。大將軍の御印。この兜を實朝公に譲り置き給ひしこそ。頼朝の明智の眼。それを今更僻事と。御謀叛あるべき様はなし。御邊如きの佞人が御側に徘徊する故。頼家公のあの御身持ナ。イヤいふまい。御身持の善悪は附家老の御邊こそ知る筈。それさへ知らぬ造酒頭。頼家公に御謀叛の心。若しあつたら何とすると。地争ひ募る無道の判官。末座に控へし三浦之助つゝと出で。御前なるぞ静まられよ。最前より兩人とも何の詮なき争ひ。頼家公に御別心の有る無いは申すに及ばぬ事。凡そ謀叛とは下より上を討たんと圖る。これを謀叛人といふ。若けれど頼家公は。正しく先君頼朝様の惣領。時政公は今武將の祖父君にもせ

よ。もと御家來には相違なし。頼家公憤り思召す事あらば。時政公に切腹あれと仰せられても濟む事。何が恐うて御謀叛なさるべき。下から思ふ私量見。地控へ召され判官殿と。一句に静める三浦が才智。フシ人々感ずるばかりなり。地時政御機嫌斜ならず。三浦之助これへ參れと御座近く。詞其方いまだ面を見知らず。若年に似合はぬ。ハテ器量の若者よな。今よりしては造酒頭同然。心置なく往來せよ。對面の印をそれくと。地三浦之助が名に寄せて義弘の一腰。引出物に賜びてける。誠に當座のフシ眉目なり。地政子の方しとやかに。お心解けて自らも此上の悦びなし。人の噂の取々なるも互に縁の遠さかる故なれば。詞縁に縁を重ねる爲幸ひ時政公お局牧の方の腹に出生の乙の娘。時姫を頼家の北の方にそなへなば。地京鎌倉の和順の驗この上なし。これ自

らがお願ひと。仰せに時政打領き。詞政子の發明は太平の瑞相。さあれば頼家が寵愛の若狭とやらんを退出し。其後時姫を送るべし。媒介は造酒頭。ハア畏り奉ると。地領承すれば實朝公。詞今年則ち頼朝の三回忌。南都東大寺にて追善供養執行へば。政子御前も宇治殿も。この靈場にて對面の上。婚姻の契約あらば靈魂も御悦び。供養の催し諸大名相心得よと御上意に。皆退出の谷七郷。松倉卿の拜領も。郷に入つては吉村が。心々の三つ鱗北條殿の智慧の海そこ量りなき鎌倉山御代の榮えぞ。ユリ。三夏久方の

第二

地八重櫻散りしく法の東大寺。總追捕使の御菩提を申ふ結構工みを盡し。金銀琉璃玻璃錦の帷。コハリ廻廊石垣悉く。五色の幟稍幾重に包み。照る日に輝く装ひは

これ彌陀境を移されたり。さてまた千僧萬僧の御經の聲澄み渡り。三尊こゝに來迎かと殊勝。フシなりける事どもなり。地此度の導師建長寺の前住榮西和尚。朱の衣もいと貴く兩人に打向ひ。詞今日は御兩所共誓固のお役目さぞ御大儀。しかし天氣快晴にて愚僧も甚だ満足と。地挨拶あれば造酒頭。詞誠に今日は御苦勞千萬上々にも御悦び則ち御法筵に御出座もあるべくなれども。女儀の事不淨も如何御遠慮あり。某よきに計らふ旨懇慫に相述ぶる。地詞にいがむ比企の判官。詞たとへどの様な弔ひも亡君何のお悦び。何故と仰しやれ。先君御逝去の跡目は當時實朝公。こりやこれ政子の方の若殿。又宇治のお局は御部屋なれども。頼家卿といふ物領を生み落されたが修羅の種。弟に天下を乗取られ何の快からう。それに何ぞや。縁組の祝言のと様々の戲言。役柄も打

忘れ媒人の取持顔。見るも中々腹筋と。取つても付かぬあてこすり。耳にもかけず和尚に向ひ。近頃仔細あつて京鎌倉の御縁組御取持仕るも。何卒國家の無事を祈る某。御推量下されと。地事を破らぬ一言に。フシ尤もなりと感ずる智識。地判官はえせ笑ひ。詞ハ、ハ、ハ、腐繩も結へば結はる。地體鎌倉の附人風がお局の御氣に入らぬ。イヤモ彼方へも此方へも塗廻すねれけ武士。ヤア傍若無人の雜言。さ言ふ和主が不忠の臣。何が何と。ヲ、サ主人に諫も奉らず。毒を吹込む邪心非道。ヤア舌長なり聞捨ならず。おと骨切つて切下ぐる。シャ小癩なと立掛かる。地こは何事と榮西和尚中を隔て。詞大切の供養の場所。もし刃傷にも及びなば。後日の言譚如何なさる。短慮至極と押鎮め。地供養の時刻は間もあり暫くは御休み。いざ先づくと勸むれば。互にすれ合ふ大紋の。

袖插し兩人は和尚の詞に従ひて。フシ休息所へと入りにけり。地供養の御幕打はえしは。北條家の乙の君時姫御寮。頼朝の後室に姉妹の名はあれど。御腹がはり末の子に後れて咲きし姫躰。造らぬ木なり手入らずは。何所の枝のふりの袖。フシ都まばゆき姿なり。地お側女中多き中片岡が娘住の江。詞御覽遊ばせお姫様。京鎌倉の大名方。この廣い境内も埋る。ばかりの賑ひ。殊に御父時政様よりの仰せ出され。お前を都へ御縁組遊ばすとやら。今日はお約束が定まる筈。地さぞお悦びでござりませうとほめれば。詞ナウラたての縁定めや。頼家様には若狭殿とて御寵愛の愛妾。その中へ嫁入は戀路の中を割きに行き。地人の恨み妬みを受け何樂しみがあろぞいのと。仰せにお側の瀧浪が。詞エ、住の江殿まだな事。頼家様は都の殿様。あんな堅苦しい大將は

お嫌ひ。今度お使者のその中で。極上生粹角前髪。都への嫁入りより。疾からあなたのお心は。三浦の方へ走り舟。地ひよんな事は杖文の轡でも權でも行きにくい。荒磯の岩侍。阿ム、堅い程お姫様の思ひの増すは御尤も。サイナ。その堅みを打碎いてお手に入れたら。敵の城を落したより大きな手柄。住の江殿は片岡の娘御よ、謀はないかいな。サアどうしたらよからうと。地三人小首傾けて。フシ戀の評定しどけなし。阿コレ斯うちやわいの。その堅藏の三浦殿。お姫様と云うては。お主様の許嫁のと猶以てむづかしから。その徳人に私がつて。堅い所を砕いたら。それからあとはお姫様の。御威光ごかしにやり付ける。地天の川にも中立の舟がなければ渡されぬ。そこで私が妹脊の舵取。阿しが肝腎のその三浦殿。わしやついに逢うた事が。ヲ、その逢はぬ

が丁度幸ひ。アレ〜。地向うへ来る古文字の素袍は遠はぬ三浦殿。サア急になつて来た。随分首尾よう生拙つて。高名見たいと女中達。姫は猶しも羞かしの森の。シ木隠れ幕の内。地かくとは知らぬ使者男やさ風流の角髪は三浦之助義村のつし鬘斗目かけ烏帽子。素袍の袖に春風のそよと。音なふシ内意の使者。阿宇治のお局より時姫様へ使として参上。誰そ御取次頼み入ると。地云入るれば幕よりも。暫くお控へめされよと。地勿體つくるも戀の仕掛とは知らずして三浦之助。素袍の角菱縫面つくり。フシ待つ間。なまめく住の江が。出合頭に義村を見ても見ぬ目の心意氣。フシこれ戀知りの印なり。地三浦之助謹んで。阿宇治様の仰せには。今度造酒頭媒酌を以て。時姫様と主君頼家縁邊の御契約。まだ御輿は入れぬとも。嫁御といへば心安さ。たまに貰ひしまゝ

東大寺の名香。いと珍らかなる夢もがな。心ばかりの贈物御慰み下されよとの御口上。地御前よろしく御披露と。フシ紗紗包を取出せば。阿これは〜御丁寧な。御口上と申しお使者がらと申し。御持參の香よりも色香の深い戀知りの。地いとしらしい殿振りを見るに思ひの増さり草。阿ア、これ〜御奏者。拙者への御挨拶より。早く御上へ使者の趣。ヲ、せはしな。地そしてアノ御元服遊ばさねば定まる御内方様はまだ御座りますまいな。阿左様。部屋住同然の三浦之助。妻とては持ちませぬ。ム、そんなら内證に云ひかはしなかつた可愛らしいお方があるかへ。かつ以て〜。洒落仰しやらずと先づお取次〜と。地取出す包の手をちつと。阿ア、これ何なさる無作法千萬。この三浦之助。つひに女中と手から手へ。物取り交したこともない家中の格式。御座りも

事による。放しめされと突き退ひきれば。地
躰たうきそこをたけながら。袂たもとをひかへコレ
申し。詞家のお格式は知らず。女中方は
また女中の格式。この幕の内は時姫様の
御殿同然。女中御殿へ殿達が。お使者に
お出いなさるゝからは。此方のあしらひに
お付きなされにやなりません。それが
お氣に入らずば。このお取次は得申さぬ。
それは迷惑。女中方の禮儀は不案内な拙
者。無骨の段は料簡あつて。御口上早く
お傳へ下され。イエ〜奏者を侮つたな
され方。私も武士の娘。此様に突つけされ
て。アイタ〜。地持病の癪かがと苦しむ
風情。拗あねて見せると知りながら。女子
相手に短氣も出されず。お薬上げんと用
意の印籠。詞イエ〜お氣の知れぬお前
の薬。どうも私はハテ疑うひ深い。地コレこ
の通りと毒見の金打。ア、御心底見えま
したと。戴かき〜。詞このお薬お前の手

から受けましたが。祝言の盃同然。地女夫
ぢや、フッやいのと抱付けば。これは又き
ついおなぶり。イ、エ誓文三浦様。なんぼ
堅かうなされても。もうかうなつたら否いなと
は云はさぬ。サア我とても岩木にはあら
ねども。そんなら應こたでござりますな。サ
アそれは。いやと仰うしやりや何時いつまでも。
この奏者が。地癪かはなほらぬ。詞ハテむづ
かしう仕込んだ癪。堅かう見せるは刀の手
前。此方も變からぬ仲人は。この印籠の地
重々情のお禮はかうと。締返す手の柔ら
ぎ口。規かきこぼれて腰元ども。詞ようよ
う三浦様。しつくりの長門印籠様蓋があ
いたサアお出と。地突つき出されて雲間
より松の葉越しの隈漏いれて誘いひ申せば吃く
驚おど仰う天。詞逃にげても逃にがさぬ正眞まことの。惚ほ
人は其方に覺おぼのある。お姫様のお文の返
事。サア〜いやとは言はれまいと。地
押遣おしる色の門違かど。戀この身代り住の江が。

あんまり具合が出来過ぎて。どうやらひ
よんな氣になれど憎氣も、フッならぬ。辛くる
氣き顔かほ。地時姫はなほ面伏おもて。住の江を頼たのんで
そなたの心を引き見るも。思おもひつめた自
らが心を推して叶へてと。手を取り給へ
ば飛び退ひり。頼家様と御縁組のお姫様。
それ故只今お局よりサアその使こそ自ら
と。御縁おんのなといふ印いん。地香の煙の色
もなき移り香。うすき形見とも。縁ゆかりの切
れるといふ心わしや嬉しいと宣のたまへば。詞
イヤ〜。たとへ御縁は切るゝとも。
天下の後見北條家のお姫様。我等體ていに御
心掛けられしとは。世の人口も勿體むとなし。
地思おも切り下されよ。エと低頭三さん指住の江
差出で。詞いかさま仰う有りやそこもあり。
やつぱりあなたは頼家様へお嫁入遊あそばし
て。いっそ私と三浦様。地ナア申しと寄添
へば。詞どこへ〜住の江殿。さう得手
勝手は此方がさゝぬ。どうでもかうでも

お姫様。地エ、もどかしいと兩方を。無理に配割匙加減。調じ合せた目出度いとフシさどめく中へ。地御兩所お成りと知らせの聲。驚き外す三浦之助。姫は名残もをし鳥の。離れがたなき後影見送り。見送り。是非なくも。オクリ御寺の。へ方へ入り給ふ。フシ案内も同じ東西の。暮しぼらせて政子の方。宇治の局も氣高さは。吉野龍田か月雪の。フシ光り合ひたる風情なり。詞これはく政子様。御佛前へ御焼香も相濟みしが。誠に今日の追福も。あなたと自ら御一所に御弔ひ申す事。地さぞ我が君もお嬉しく思召さんとありければ。地こなたも鬼角う御挨拶。三年と過ぎる年月も。果敢なの浮世懐かしの今日の日とばかりにて。互の袖に玉こぼす。フシ露こそ手向なりけらし。地局はいとど萎れ入り。老少不定の憂きことも。誰がいつの世に。フシ始めしぞ。地我が君此

世に在さば自らが事若が事。今の思ひはなきものを一生埋れ果てなると。悔み涙は妬みぞと。心に障る政子の方。詞イヤなう宇治の方。アノ武藏野に見る月も。賤が伏屋の濁江に。地宿りし月もも一つ。所々の風雅により眺めも違ふ。その時々を辨へて。世上に付くがよささうな。フシ物ではないかと宜へば。詞これは御尤もさり乍ら。春の花咲き冬は雪。天道四季に私なし。地時をのり順を越え。辭儀も作法もなき時節。詞サアさう思すのが心の僻み。尤も頼家殿も。君のお胤といひながら妾腹なれば是非なき不運。イヤその母々の品位は變るとも。頼家は惣領ならずや。兄を差置き弟が。上に立つといふ事が。ヲ、あるともく。たとへてに生れても君の妻たる自らが。生み落したる實朝を。世に立てるのが天下の掟。殊更子は母によつて貴し。そもじは誰ぞ。

伊東祐親の娘ならずや。現在我が君と仇ある中。怨敵の孫娘御咎もある筈を。却て君の御情。活計歡樂榮耀の餘り。源氏の跡を嗣がせんとは。鶴鶴の巢を梅が枝に。かけるより遙かのこと。中々及ばぬ叶はぬと。地云込められてくわつとせき立ち。詞エ、聞きにくい一言。女でこそあれ頼家を。一度武將に立てて見せう。ホ、ホ、イヤそりや蟻螂が斧同然。取らるゝなら取つて見や。ヲ、取らいではと打掛ひらり。地持たせし長刀互に振込み。サアくく詰寄りしは。野分に騒ぐ萩萩の亂れあうたる如くにて。地すは事こそと腰元下婢。手に汗握る寺中の騒動。佛の會座も忽ちに。修羅の巷へ駈來る片岡。待つたくと氣も狂亂。押隔てどどつかと坐し。詞エ、情なき御有様。御兩所の御争は。偏に天下亂れの端。この御心付かざる事。淺まし御所存や。

殊更今は亡き御靈祥月の御命日。そのお位牌の御前にて。かゝるさるがなき賤の女の御争は何事ぞ。國家の爲を存する故。京都鎌倉御縁を結ばし。自然と和らぐ御代の礎。地さあれば草葉の亡君も。嗚な悦びまします。操の鑑思さずや。不肖の臣が胸臆を。苦しめ砕くは千變萬化。九牛が一毛も聞召し分けられて。何卒和順なし給へと。割つ口説いつはら／＼はら。涙は忠義隨一の上立つたる武夫の。フシ諫に誠を現はせり。地榮西和尚しづと。御弟子引連れ出で給ひ。兩後室へ愚僧が御意見。これにて悟り下されと。地持たせし一軸傍なる。松の小枝にさりと懸け。詞なんと御覽なされしか。天の時正に到るといふ文字。兎角天下を治むるは。天より自然其人に。與へ給ふにあらずんば。中々治むる事能はず。既にもつて今日。追福し奉る右大將。蛭が

小島の瀟泊も。後には天の時到り。六十餘州の總追捕使。御跡目の御述懐。御互に遺恨とならば。いよ／＼御代の爲ならず。地篤と御合點なされしかと。出家氣質の一行。和尚も名にし建長寺。フシすつぱりとした意見なり。地政子の方理に服し。先君の追善に。はしたなき言争ひ妾が過り。詞イヤナウ宇治の方。必ず心にかけられな。地何が扱只今の無禮はお赦し下されと。フシ互に和らぐ御挨拶。地造酒頭頭を下げ。詞憚り多き諫言を。御聞入れ下されしなら。御恩は重き細石。地巖となりし御代萬歳。見せ奉るがすぐさま追善。佛事終れば御前にも。いざ御歸館と勸むれば。解けぬ心を打掛に。包む式禮政子の方。片岡和尚見送り。オクリ館を。へ指して歸らるゝ。フシ跡に局は。張詰し心の怒止めかね。スエテ千々に砕くる思案の體。始終の様子三浦之助。さあらぬ體に手を

つかへ。詞日も夕陽に斜なれば。御立ぞふと申すにぞ。地しづ／＼かたへに歩み寄り。懸け奉る雌雄の名劍。小脇に手挟みいかに義村。詞太平の印を見せんと頼朝様。この東大寺へ納め給ひしこの劍。雄劍は自ら雌劍は其方。これを帯せん兩將を。選み來らんそれ迄は。地勘當なるぞと一口を。差出し給へば兩手に受け。詞四海太平なる時は。弓は袋にし太刀は鞘に納むると雖も。再び用をなすべき時節。近きにありとの御心候な。ヲ、いふにや及ぶ。先君の御恩を忘れし。北條一家の權柄我儘。地鎌倉山の月影を他所に。眺めて頼家を。日陰の花となし果つる。其口惜しさは如何ばかり。たとへ浪路は干潟となり。巖は湯玉とかへるとも。恨は晴れじ我が心。推量せよや三浦之助。詞ハ、ハ、實に御理。遂一に承知仕ると。地同じく寄つて懸け置きし。フシ弓矢追取り

奉る。詞アレ／＼御覽ぜあの一軸。天の時正に到るといふ。中なる文字こそお恨みの目當ならん。地只一矢にて御鬱憤。散じ給へと義村が。的を外さぬ黒星に。ヲ、心得しと打番ひ。きり／＼と引絞り。手先上りに切つて放せば過たず。文字のたゞ中はずしと響く暮の鐘。お立の行列主従が別れ。勇んで ユリ 三重立 歸る

第三

歌實に治まれる例には松に小松の生添ひて枝に枝葉に葉の榮え。ナホスホシ契り盡きせぬ源や。地御酒の機嫌も頼家卿。晝夜分たぬ舞歌ひ。お側小姓が笛鼓。白拍子には若狭とて器量もよしの櫻花。戀しき人は君様と。舞に事寄せ頼家の膝に凭る品形。よう濡事の生粹めと。側からはやす囁子方 ヲシいや／＼どつと褒めにけ

る。地大將御機嫌斜ならず。詞いつ見ても美しい器量につるゝ扇の手。どうも堪らぬ若狭の前。この頼家が北の方。ハイ。地そのお願は私からいつ／＼迄も其通り。必ず變り給ふなと又濡れかゝる一奏。地比企の判官御前に出で。詞君にも知し召さるゝ通り。片岡諸共鎌倉へ下りし處。心得難き北條殿の所存。何時合戦あらんも知れず。まさかの爲の便にと。味方に招く諸浪人。中にも佐々木四郎左衛門高綱こそ。今の世の軍帥。彼が行方を詮議いたし此方の大將とせば。此上やあるべきと母上の御説を受け。世を遁れ住む佐木が在所。此程より尋ね捜す人數の手配。殊に又。造酒頭が計らひにて北條家の娘時姫殿と。御婚禮を取結び追付け館へ参るは治定。御祝言とある時は若狭殿の爲にもならず。何と御思案はあるまいかと。地聞くよりはつと若狭が顔色。見

て取る頼家。詞コレ／＼だんない／＼。片岡が指圖でも。そもじを除けて頼家が。妻と定める者はない。イヤなに判官。我思ふ所存もあれば片岡出仕致すとも。奥御殿へ通すなと侍中へ申付け。堅く禁制たるべき由小姓どもより申渡せ。コレ若狭稱はずと一獻酌み。さらりと流しやと大將の。地色に心も亂れ絲。もつれかりし片岡が。ヲシ難儀と更に白書院。地取次の侍罷り出で。詞お召によつて佐々木四郎左衛門高綱お次に控へ罷在る。通し申さんやと伺へば。ヲ、それ待ちかねしこれへ通せ。對面せんと仰の下。地御前間近く立出る。佐々木四郎左衛門高綱。名にのみ聞きし武夫のヲシ行儀亂さず平伏す。地判官佐々木に打向ひ。詞對面致すは初めなれど名は聞き及ぶ高綱殿。此程より貴殿の行方尋ね索めるその仔細は。軍法智略隠れなき佐々木四郎左衛門へ我

が君竊かに。御頼ありたき一大事あつての事。よも違背はあるまじと。地探る詞に莞爾と笑ひ。詞先君頼朝一天下を切治め。草木も動がぬ今の世に軍術武邊も益なき事と。跡を嘸し山林に引込んだる佐佐木高綱。今改めて御召出しは。太平の世に武を忘れぬ名將の御心掛。委細の儀御尋ね申すに及ばず。御頼の一大事高綱承知仕る。御心安かるべしと淀ます濁らぬ辯舌は、ッシ水の流れる如くなり。地煙たいて相手にさしもの大將。詞ア、いかう遊びが滅入つて来た。佐々木を母に見見えさしコレ若狭。其跡ではしつぼりとサアおちやいのと。地大將は帳臺深く入り給へば。然らば後刻と判官に。目禮式禮高綱も、ッレ奥にお供し入りにける。地又も奏者が聲として。詞御前様より仰せられし佐々木四郎左衛門高綱。只今伺候致せしと。地聞いて能員ソリヤ何の事。詞たつ

た今目見えした佐々木四郎左衛門二人あらう筈はなし。ム、聞えた。名ある武士ども召抱へある時節を考へ。匹夫下郎の騙事。何にもせよ仔細であらん是へ通せし明さして實否を糾さん用意あれ侍中。地遣戸口に身を潜め握り詰めたる柄の問も。心を配る高綱は。春待ちかねし鶯の初音を語ふ心地して。ッシしづくと入來り。詞召に應じて佐々木四郎左衛門只今參上仕る。取次頼み存すと。地聞きもあへず。判官がソレと指圖に雙方より。取付く二人を引掴み。何の苦もなく投退くれば同じくかゝるも右左。うんといはして寄せつけねば。上意なりと判官が。聲に流石の高綱も躊躇ふ所へ附け込む家來腕を廻はせと。ッシ追取り巻く。詞ヤレ暫くと御聲かけ。地ヘルシ立出で給ふ宇治の方。地君に別れし玉櫛笥まだ艶やかな色も香も。ッシ胸らば落ちん袖の露。

詞ホ、豫て聞き得し佐々木四郎左衛門。自らこそは頼家が母宇治の方顔合すは初めなれど昔に返る主従三世。今より頼家が力となり偏に頼む味方の軍師。ハア長つては候へども。さ程に沱某を懇望あるに引替り。御家來中の今のしだら。ヲ、其不審は道理なれど。味方の士卒を驍かす高綱。その手練を見よう爲。ハ、ハ、ハ、コハ御説とも覺えず。身不肖の某なれどもまさかの時は軍師にも。御頼みなされんとの御心には引替へ。劍術柔術の業くれにて。佐々木が器量御試し遊ばさるゝは。淺はかなる御計らひ。地左様の武藝は一人に敵する端武者の技。軍師の器量に足らず憚りながら。大將の御賢慮薄く候と。武威を恐れぬ辯舌骨柄剝符を合す。ッシ二人の佐々木心一つに奥と口。きつと御目を付々に。わつて云はれぬ。ッシ此場の仕宜。詞ヲ、一言一句に備りし軍師の器量。頼

もし、此上は頼家に目見えさせ事ゆるやかに奥の間で。主従の盃ごと。コリヤ腰元ども佐々木を早う伴へと。地御にはつと高綱も威勢は。雲に立昇る龍に翼や虎の間のオシリ御前をへ指してツン立つて行く。地かゝる折しもお庭の内。下れ下れも柔らかな腰元どもが口々に。同見れば花を商ふ人さうなが。此處をマア何處ぞと思ふ。忝くも源の頼家様の御殿とも憚らず。中間衆が見付けたら大抵の事ぢやあるまい。早う御門を出やしやれと。地叱る詞も。ツレなまめきし。地御免々々と手をつかへ。同イヤ申し女中方。私は近郷の小百姓。畑の際には此如く花を擔いで賣りあるき。通る度々この御殿。外から見てもきら／＼と結構づくめを見るにつけ。ア、内へ入つて見たい事ぢやと。思ふが一途。規いても呵人なく。入りかゝつた御門の内これが何と出られませう。

とてももの事にとつくりと入れさして下さりませと。地いひつゝ立つて行かんとす。判官聲かけヤア何奴なれば尾籠千萬。同御前様の御側近く。慮外致さば一討と。地叱り飛ばされ吃驚し。籠より取出す梅の花。判官が前に置き。同ハイ御赦されて下さりませ。御前様がかかる／＼と出てござるとは夢にも知らず。ア、勿體なや／＼。お前様の執成で拜まして下さりませ其代り此梅を上げませう。イヤ申し賣り餘りではござりませぬぞえ。地物は云はねど此花はお詫の種の一枝と。いはせも果てず。同ヤア見かけによらぬと性根の太い奴。武士を捉へて嘲弄する。地憎い頬笏歪めてくれんと飛び懸り。目鼻もわかず丁々々と打つ度ごとに散る梅の。落花狼藉賑ひなく。びくともせねば手は見せぬと。突放されて今更に。返すツン詞も塵打拂ひ。同ア、去にましょく。慈

悲専らと思ひの外。さりとては惨いお衆達。何ほ結構な著物着て。仔細らしい顔召されても。かう當りがひどうては御出世はなりません。地貴い寺の門前から去んだがましであつたもの。入つて見たさに痛い目した。命が物種おさらばと吹き／＼立出づる。それ繩打てと宇治の方御聲かかれれば能員が。取つて引立て無二無三提督手繰つて小手搦。權威に壓され詮方も。ツン投首してぞ居たりける。地比企の判官取敢ず。同斯様の奴等が徘徊致し。御前様のお身の上悪様に觸れ歩く。愚人奴等への見せしめに首打放し成敗の。手本に致し候はんと。地聞きもあへず。いかさまそなたの言やる通り。下として上を計らひ。頼家や自らが捉を諷る者あらば。たとへ町人百姓でも。生けおいては政道立たず。處刑の手始其者は。自らが手をおろし手討にする覺悟せい。イヤなる能員。

斯くも蓋りに入込むは。外面を守る役目の通り。詰りくゝの遠侍に守り厳しく申付け。ともに心を配るが第一。コリヤ腰元ども。其方達は奥へ行き。自らが腰刀早くこれへ持來れと。地仰せに生きた心地もなく。申し奥様。今の様に申したのでお腹が立たば幾重にも。コレ申し女中方。詫して給べとおろく聲。願へどいづかな弛めぬ判官。阿スリヤ御前様には自身のお手討。ヲ、云ふにや及ぶたつた今。そなたは次へ腰元ども。地早うくと宇治の方。厳しき下知に能員も。フシ其儘立つて入りにける。地圍まれし今ぞ命の置所。ホッテ屠所の歩みの羊より響く時計は八つも過ぎ七つ何とか女子供。きらめき渡る腰刀御前に直し置き。フシ立つて入るさの。月ならで。フシ花にその日を置く露の。地涙と共にコレ申し。阿殺される此情情しいとは思ひませぬが。今此

處で斬られたら。跡に残つた女房子が路頭に立つは知れた事。一人と思へど親子三人。見殺しにして何の益。何卒お助け下されと。地拜み度うても後手にエエテ縛り搦めし有様を。地見やる此方も打疊り。清くさせんと下立ち給ひ。阿敷き慕ふは理ながら。助けられぬ其方が一命。時移る程思ひの思ひ。源家の大将。頼家が母宇治の方が手にかゝるを。果報と思ひ諦めよと。地すらりと抜いたる刀の光。恐々そつと顔打眺め。阿スリヤどうでもこなた殺す氣か。ハア是非に及ばぬ。とでも切られる上からは。激う死んで見せませう。その代り又此方様にも。すつぱりとした刀の切れ味。サア切らしやれと突付ける。地身體の捻りに宇治の方きつと目を付け合點と。丁ど切つたる覺えの手の内。解ける繩目に吃驚し。阿ム、こりや切れたのは繩ばかり。スリヤ殺しや

なされませぬか。ヲ、何のいの。生けて再び自らが。頼みたい事あつて。殺すというたはみんな嘘。人前つくりし心を見やと。地刀は鞘に納むれど。まだ治らぬ胸の中。底意如何にと兩手をつき。阿百姓づれの私に。頼みたいと仰有る譯はえ。そなたに惚れた。エ、イヤモ今日ほど恐ろしい事を聞く日はない。長居したらどんな目に遭ふも知れぬ。もうおさらばと立上る。イヤ去なさぬ。云ひ出すからは金輪際。たとへ何れの花にもせよ。その一枝は。地自らに折らしてたもと慕ひ寄り。取る手に絶つて。阿エ、滅相な。女だてらに男に惚れるといふ様な無遠慮な事があるものか。地なうくこはや恐ろしやと。振切りくゝフシ逃げ惑ふ。地道を塞いで宇治の方。阿そんなら手討にあひたいか。サアそれは。厭ならこの戀叶へいと。地退引させぬ難題に。返答ほうど行

語り。詞サアくそんならマアあいござります。ア、お前様もいらぬ物好きアアしたが如何でもそぐはぬ色事が當世の流行物。あなたもお公家様の娘御なら。

我等さしづめ痛い腹。必ず切らして下さりませ。それはさうぢやが如何いふお心で惚れさしやました。譯を聞かして下さりませ。地ラシさればいの。詞君に後れておのれやれ。貞女の道は背かじと思ふに違ふ起臥に。地契り置きにし私語思ひ出せし床の中。只一人寝の手枕に深き思ひを打ちわつて。云ふべき人もありませんと武士町人の別ちなく。入込ませしは幾萬人。數も限らぬその中。今日といふ今日其方の顔。一目見るより戀草の闇を縫ひゆく螢より。焦るゝ宇治が袖袂。下ゆく水の流さへ。外には洩す。フシ人もなき。地わしが寢所にこつそりと忍男といはゞ云へ。サア打解けて給もいのと

ひつたり濡るゝ雨が下。又とあるまいこの戀路。在所育ちの麥飯で。釣られし鯉は淀川。フシ七年物と知られたり。詞イヤ申しそのお心。何時迄も必ず違へて下されませぬえ。ヲ、何のいの。一旦惚れた上からは。武士は勿論高家でも。いつかな觸れぬ肌と肌。そなたと合すが互ひの固め。地サアおぢやいのと打連れて上る疊の裏表。片岡造酒頭出仕なりと呼はるにぞ。はつと仰天こなたにも。人音すればせん方なく。隠し所も宇治の方打掛ひらりと忍夫。暫しは宿る下蔭に。オクラ身を潜めてぞラシ親ひわる。地ハルッ春の日脚の。長廊下板敷の音しとやかに。武士のフシ鑑の大廣間。地それと見るよりハ、はつと。座を立隔て造酒頭謹んで兩手をつき。詞こは御前様只お一人。心得がたき館の構へ。殊に只今侍中が申すを聞けば。片岡御殿へ通すまじと遮つて

申せども。某かつて合點參らず。地御所存いかにと尋ぬる中。詞ホ、その仔細は某が。地云ひ聞かさんと立出づる。大江の廣基入道東元。頭ばかりは丸けれど角菱立つる眼付。眞中にどつかと坐し。詞御邊一人奥御殿へ。通さぬといふ仔細。語るに及ばぬ貴殿の胸に。覺ある今度の使者。鎌倉へ參りながら。その役目は遲滯に及び。剩へ時政の娘時姫を頼家公に娶さんなどと。旁以て心得ぬ心底。さるによつて御前より仰せ渡さるゝ右の條々。地言譯あらばいへ聞かんと。席を打つて詰めかゝれば。詞ホ、それにこそ片岡が深き所存。此度鎌倉に立越え事の様子を親ふ所。時政の心底いかにしてもその意得がたく。其儘にてさし置かば。遂には兩家戦ひの。亂を押へん其爲に。北條殿の指圖に従ひ時姫を請受けしは。なほ御一家の縁深く。自然と和談に及ぶは治定。

そこを以て片岡が。三ヶ條の御不審も。

只婚禮にて事を治め立歸つて様子を聞けば。宇治の方の御身持。武士は勿論町人百姓。毎日々々入ませ。御目に止りし者

としては。御疑所に引入れさせ。放埒懦弱の御遊びと。地聞きたる時は造酒頭。は

たと差がる胸の戸も。明けて一人誰あつて。諫言申す者もなきか。エ、是非もなき

次第やと。思ふに任せぬ片岡が。骸は泥に埋むとも。一心變ぜぬ魂と。知ろし召

されぬ事ならば。再び生きて歸るまじ。同。恐かならぬ鎌倉の。大事を前に置きな

がら。色に溺れ酒に長じ。世の人口にかかるといひ。地覺むれば夢の跡先に。お

心付けて唯一言。頼家公に御意見の。杖柱ともなるべき御身。思ひ止つて給はれ

と。忠に凝つたる片岡が。諫める五體に汗霽。フシ袴も浸すばかりなり。地宇治殿

氣色を變へ給ひ。同ム、自らが身持放埒。

町人百姓を引入るゝとは。跡方もなき噂を取上げ。貞女の道を背きしと。無き名

を立つる推參慮外。女と思ひ侮つてか。詞が過ぎるぞ造酒頭。ハツ／＼御心に障

りなば。其儀は幾重にも御宥免。唯返す返す頼家公へ。御祝言の御勧め。この嫁

入を變改あらば。最早和睦も叶はずして。亂に及ぶは今此時節と御賢慮。地廻らさ

れ。時姫君の御事のみ。偏に願ひ奉ると。我が身に代へて祝言の納まり願ふ四海浪

豊かに。フシ見えぬ風情なり。地入道東元聲荒らげ。同。同し事をぐど／＼と。主人

に向ひ尾箱の振舞。ヤア／＼誰かある。アレ引立てと呼はる聲。地長つたと比企

の判官。襖あらはに是さ片岡。同。鎌倉方のぬらりくらり。言譯しても返らぬ事。

去に端が無うて得立たずば。地立たしてくれんと立掛かるを。腕首掴んで。フシ真

逆様。地見向きもやらす摺寄つて。同。た

とへ御答蒙るとも厭はぬ／＼。地此上は頼家公へ直に御願ひ申さんと。いふ間あ

らせず入道が。推參なりと打かくる。手裏劍丁ど身をかはせば。小柄は外れて宇

治殿の打掛あらはに。アイタ、ハ、ハ、ハ、小

手打込まれし以前の男。一座の驚き生中に。隠立して川霧の。現はれ渡る宇治の方

暫しフシ詞もなかりしか。地耻かしや造酒頭。最前のそなたの意見。面目なさも切な

さも。思はれぬ程可愛いは。眞實惚れた忍び男。女の因果と堪忍して。必ず叱つて

給んなど。地詫びるは武將の御母君。天下晴れたる御身持采れて何とせん片岡。

入道も苦笑ひ。同。頼家公の御母公したい事なさるゝが武將の威光。誰が何と申す

者がござらう。片岡が押付願ひ。御得心ないは知れてあれど。身が取次してくれ

う。次へ立ちやれと權柄顔。地破るは易く守るは片岡。結ぶは早き戀の殿。三つ

に別るゝ奥の間に。笛の響も大將の機嫌
とりん。鼓の音銀燭臺の影高く、フシ輝き
わたるばかりなり。地若狭はそつと奥の
隙。出づる後に東元が。聞くとも知らず
獨言。詞腰元衆の話を聞けばマア祝言は
止まつたさうな。これといふも入道様の
お蔭。エ、忝い。それに引換へ片岡
殿。わしが爲には戀の仇。イヤその敵は外
にある。エ、外にあると仰有るは。ヲ、
理を知らねば不審尤も。君を大事と思ひ
込まれし志が切なる故。入道が語つて聞
けん。地近うくくと小聲になり。詞何を
か包まん。其方の仇となるべき人こそ。
館の後室宇治の御方。エ、ヲ、吃驚は
道理々々。エ、情なや。武將の母といは
るゝ身が。下司下郎を引入れて。アレ寝殿
に不義密通の私語。先君頼朝の御恩を忘
るゝ人非人。鎌倉には頼家公。謀叛など
となき名を立つるも。皆宇治の方の不所

存から。この人を生け置いては。頼家公
の御身の仇。家の爲天下の爲。御身竊か
に寢所へ踏込み一刀に討つて給べ。ア、
これ申し滅相な事ばかり。大事のく殿
様の母君。殺せとは勿體ない。シイ。すり
やこなたは頼家公が大切にはないか。大
切ならば後室を。殺すのが殿のお爲。よ
し。これ程の一大事。口外へ出すから
は最早暫時も猶豫ならず。こなたが得殺
さずは身が手に掛けて。家國の禍を拂は
んと。地奥を目掛けて駈入る氣相。コレ
なう待つて入道様。詞待てとは此方が討
つ所存か。サアそれは。サアくどうぢや
と。フシ戴り付けられ。詞そんなら宇治様
殺しませう。君に添ひたい殿様を大事。
地大事にからまれて。同しお主といひな
がら。お家の爲には代へられぬ。詞仕畢
せてお目に懸けませうと。地口にいふさ
へ勿體涙。胸にせきくる。フシ若狭の水。

詞ヲ、出かされたあつばれ。それで
こそ頼家公の北の方。これ此刀ですつば
りと。アレ。あの囃子の終らぬうち。時を
過さず合點か。地心得ましたと脇挟み。
氣も太鞘の白拍子目釘潤して忍び足。オ
クリ親ひ。へ窺ひ。フシ入る姿。地見やる眼
も笑齒に入り。邪智を隠せし胸算用。獨
り領く思案の後。奥よりひよか。以前
の男。思はずばつたり。詞ハアこれはし
たり。地御赦され。フシてと行過ぐる。詞待
て。汝合點の行かぬ奴匹夫下郎の身を
以て。後室に近寄る不敵奴。汝も生けて
は歸されぬ。覺悟して居をらう。エ、イ
これは又迷惑な。花賣りに来たお庭先で。
後室様のお目に入つたは私が花の科。此
方から仕懸けた色事ではなし。畢竟御前
様の御悪性様ながら。私は何にも。ヤア
ぬかすまい。そればかりでない。汝最前か
ら何ぞ聞いたであらうがな。エイそれは。

聞いたでもなし。聞かぬでもなし。それ聞いたら赦されぬと。地すらりと抜いて切付くるを。脇息おつ取り丁ど受け。詞こりや何となされませす。ヤア御前様を誑し。お家を亂す大罪人。地観念ひろげとまた切込む。鏝元丁ど打落し。脇腹うんとたぢくく。透かさず駈寄る比企の判官。主は誰とも手裏劍に。ぎやつと一聲フシ敢なき最期。地見向もやらす一間に向ひ。詞良禽は木を見て棲む。大將の器量を選び。此程民間に名を隠す。近江源氏の嫡流。佐々木四郎左衛門高綱。今日只今頼家公の御味方。軍帥となる時到来り。家來刀と詞の下。地ハアはつと一度に立出づる。妾も一對二人の佐々木。入道が恠怪。様子いかにと窺ふうち差出す大小おつ取つ。床几にどつかと坐したる面體。主從變らぬ三人佐々木。フシ三國一の勇士なり。地御劍携へ宇治の

方。御悦びの聲高く。詞六十餘州に一人の軍帥。待焦れたる甲斐あつて。今といふ今手に入れ。味方の礎大願成就。頼朝様より傳はりし雌雄の劍と名づけたる。二口の太刀。軍帥と頼む上は。手渡しする雄の劍。士卒を旗かす采配ぞと。地恭しく手に渡し。詞心得難きは大江東元。頼朝様の御恩を受け。頼家の師範とも付置かれし身を以て。何恨みあつて鎌倉へ。内通は致せしと。地仰せに東元起直り。詞存じ寄らぬ御疑ひ。鎌倉へ内通とは何を以て。イヤく大江殿とぼけまい。豫てより北條家に心を通はし。隙あらば頼家御親子を。害せんとする貴殿の底意。争はれぬ證據は。最前我が手に受け留めし。小柄の手裏劍。片岡目あてに打つと見せて。正眞の狙ひ的は。宇治の方であらうがな。ハ、ハ、其時我が手に受けずんば。宇治の方はその座で落命。そのみなら

す。貴殿の娘を若狭といふ白拍子に仕立て。頼家公に放埒をすゝむるが。鎌倉へ内通の證據。お隠しあるなと言は。地三寸刃板釘打つ如く。詞ム、流石の佐々木よく見付けた。淫亂不義の宇治殿を殺さんと謀りしは。家の益を思ふ故さ。又白拍子若狭を我が娘とは。何を證據。ヲ、その實否は谷村小藤次。四宮六郎。主人の下知にて鎌倉の様子を窺ふ忍びの犬。妾腹の娘若狭。薬の上より扇が谷の郷に預けて置かれた事迄。聞抜いて来たことなたの腸。サアく白狀々々と。地話めかけられてさしもの入道。返答塞がる障子の内。太刀普丁と唐紅。白拍子が首提げ。立出で給ふ頼家公。フシ退つて。敬ひ奉れば。地寛然たる御氣色にて。詞京鎌倉と隔りし。此頃の人心。圓りかねたる我が放埒。今改むる手始めに。成敗せし此女。他人の手に人となり。入道が娘とは今日

迄其身も知らず。始めて開いて身を悔み、覺悟の最期。主を謀る天罰。我が子に報ふと知つたるかと。地常に變りし御上意に。一句一答面し。思へば無念せん方な。自害と見ゆれば高綱押し止めヤレ暫く。再假にも先君頼朝より。若殿の御師範と。名を付けられし大江の入道。心を改め忠勤あらば。生害には及ぶまじ。一旦内通の貴殿なれば。所詮生けては置くまいと。思うての覺悟ならんが。佐々木四郎左衛門高綱軍師となる上は。貴殿ごときが幾萬人。内通しても苦には致さぬ。

お心遣ひ御無用と。詞人を育つる大器の詞。東元始めて生きたる心地。詞げにも實にも。今の命を戰場にて。我が君に奉るが。忠勤の第一。差當つて御近習の比企の判官。打止めたる曲者。忠義始めに生捕つて。地御覽に入れんと立端の鹽。しほからい目に大江の入道。唐犬の

逃吠してぞ入りにける。地大將重ねて。

詞佐々木を軍師と招きし上は。母君諸共日頃の念願。時まさに到るはこゝ。急ぎ士卒を差招き。評議如何とありければ。

地佐々木高綱暫しと止め。詞御説には候へども。北條家には御存じなき。今日の次第を次の間に。窺ひ待つたる武士二人。地對面致せし上の事と。家來を近づけ。

詞ヤア〜兩人。其方達は宿所に歸り。

我が身の上を告げ知らせ。地早く〜と追ひやつて突立上り高聲に。詞鎌倉よりの附家老。片岡造酒頭。佐々木四郎左衛門高綱見参さふと呼はれば。地襖をさつと造酒頭。出づる後に組子の侍。おつ取り巻くを事ともせず。詞最前かくと見極めし。我が推量に違ひなく。扱こそ佐々木でありしよなど。いふ間あらせす左右より。捕つたと聲かけ寄る所。その手を。すぐに引掴み。かくも君より御不審のかゝ

り繋がる鎌倉に。足を留めたる造酒頭。

たとひ主君の御意なりとも。滅多に繩はかゝらじと。彼方此方へどつさりいはせ。臣は臣たる道を盡し。君を守るが習ひといへど。疑ひ蒙る我なれば。只此儘に出

城して。再會は重ねてと。地又も組子が打ちかゝる。十手透さず引つたり。眉間眞甲うち割つて。云はぬ、ッ互の胸と

胸。地宇治の方御聲かけ。詞誤つて疑へ

ば。人とも亡ぶといへど。意地を磨くは武夫の。道にはづれし造酒頭。再び歸り逢坂の。關を破ると破らじと。其方一人に止めしと。地仰の中より佐々木高綱。詞味方にあつては一方の。旗大將ともなるべき御邊。其儘出城せしむる事。我を赦して竹林に。放すとは云ひながら。我又斯くある中は。何條事のあるべきぞ。地すは合戦に及ぶ時。何萬騎にて寄するとも。詞高の知れたる端武者ども。

地四方に亂るを、鉦、揃へ。搔首梨刺鐵砲の音も烈しき。味方の軍勢。君の威勢をコト、眞甲に。さしも功ある鎌倉方。どつと寄手の勢にて。勇めや。かゝれと數多の士卒。爾諸葛が術をなすとて。我方寸の計略にて。そこにも佐々木。こなたにも。佐々木々々々と名をふらし。こゝの森蔭彼處の堤。追詰め。一時政に。泡吹かせんは高綱が。胸に納めし軍の備へ。詞涼しく言放せば。地造酒頭につくと打笑み。爾我とてまつその如く。君に疎まれ君臣の。禮儀背きし上からは。本國に引籠り。旗上せんは易けれど。末代此身の瓊瑾となる。我が悪名もさつぱりと。地流せば其名も楯の板。只いつまでも忠臣の。必ず二字を忘るゝなど。味方に付くとも付かぬとも。善惡二つを一道に。納めて歸る造酒頭。さらば〜と高綱も。御親子、ッシ誘ひ奥と口。地東

元が采配にて。造酒頭を歸さじと。翠柱刺股振廻し。逃さぬ遣らぬと辨いたり。アヤ性懲りもなき有財餓鬼。残らずうせいと聲かくる。地物な云はすな柄めよと。右往左往に打つてかゝる。鼓は奥の間諺の拍子。ウタヒ舞延年の時のわか。これなる山水の。落ちて巖にナホス響くこそ。地秘術を盡して争ひしが。さしもの大勢たまりかね逃げ散る跡に我武者の二人。抜合せて切りかゝる。かい沈んで翻筋斗打たせ。直ぐに腰骨踏みつくれば。やらじと取付く、ッシ組子が急所。地仕止めしは何者と。見やる後の障子の中。衣服改め佐々木高綱。爾判官を討ちとめて。我を庇ひし小柄の返禮。受納あれと高綱が。地立つる勇者の道々に。奥は安宅の舞謡ひ。とくとく立つと弓取の。心ゆるさぬ造酒頭。暇申してさらばよとて。笈にはあらぬ相生の。祝言さへも三々九度。ッシ言譯何と

片岡が。虎の尾を踏む毒蛇の口。通さぬ佐々木が四つ目結。紋にあらはす四天王。その隨一と鳴りわたる鐘もさやけき。三更夜あらしの

第四 道行旅路の濡衣

サハリ憂き事の。つかさを問へば世の人の。戀と旅とに有明のナホスハルッシ光は空に。いや高き。北條時政の深窓に。メエテ秘藏娘ともてはやす。名も時姫の時にあふ。長地鎌倉山をあとなし郡路さして嫁入りの道は東路戀路はよそへ。小オカリされて。はづして徒路の野もせ。オカリ數かぎりなき傳の中を隠れ路近江路を。ッシ心のあてど共々に。お側去らずの住の江が助け参らせ玉銚の。道ならぬとや四方山の噂に濡れん。小夜衣裾吹き拂ふ春風に。ッシオカリ露踏みへわけて辿りゆく。村々ツビキ果しなく。ホッシ物思ふ身は若草や紫雲

英土筆も目に添はで。葉越の瀧の木靈さへ。我を追ふかと怪まれ木の間。隠れに立忍ぶ。そなたの方より一群の。往來の中に聲高く鹽の安賣。山ばかり噂都の伊達姿。商ふ鹽に、フシ數々あり。日月晝夜満干の潮。どうと寄せ来る浦浪は。ハズ、須磨の上潮鹽なれ衣。松風村雨一荷にして。行平これを管め給ふ赤穂に名高き鹽の色。雪より白いを此如く富士の山もり安いが一徳。押合ひ。フシ舞合ひ。隣りのお玉や向ひのおりんがこぼれかゝつて我等が袖を。じつと捉へて鹽の目の。戀路は辨に。フシはかりなきサア召せ〜と口上に。數多の往來興に入り。笑ひをフシ踐し行過ぐる。被衣あらはに姫住の江。義村様かと思合す顔。素知らぬふりに行く袂。二人はやがて右左。縫り止めてコレ申し。さ程無情いお心と知らぬ私が憂き思ひ。都の方へ嫁入も父御の仰せ是非な

くも。其場を紛れ落人とかく成りゆくを可愛やと。少しは思ひ給はれと口説き給へば住の江も。ほんに私がいろ〜と口説き落した其上で。お姫様への媒人をあつとで思へば味な氣に。纏るゝ絲や。青柳の。亂れて今は。啣ちぐさ。散花と櫻の二思ひ色香をわけて。さいたづま。手を取り取りや虎杖の。離れがたなき蔦若葉。縫り口説けど大丈夫の。心は空に春の風。ナホスフシ吹きわけらるゝ。袖袂放ちはせじと篠原をあなた。こなたと附纏ひ。亂るる裳裾紅の。入日の波と見え隠れ。木の間の櫻ばら〜。春の最中の雪おろし花踏み。わけて。ユリ三瓶

第五

よ。此所よと、フシ立ち休らひ。詞コレなう住の江。そなたの世話でやう〜と。地廻り逢うた戀人に。振捨てられし我が身の上。推量して給もいのと、ヌエ派先立つかこち言。ヲ、詞お道理〜。物堅い義村様でも木竹ではあるまいし。地此方の心が届いたら何ば無情男でも。情心が出来そなもの。詞何にもせよ此邊を尋ねるにしくはなし。地御氣遣なされなと力を、フシ付ける其折柄。地後の方より同勢引連れ。北條の家來關口平太姫を尋ぬるうろ〜眠。かくと見つけ走り寄り。詞時姫君にて候な。御行方知れざる故方々と尋ね御迎に參つたり。地住の江殿にも御供あれいざ御出と申せども。イヤ〜鎌倉へ何面目に歸るべしと。否み給へば關口平太。詞片岡殿の思慮あつて悪しくは計らひ申さぬ由。地是非御供と住の江も俱に引立て大勢が。フシ東路さして急ぎ

ゆく。三下り歌舞の山坂花見りやすべる。
花見りやすべる。花に思ひがよいと息杖。しやんとせ。則ヤイ仁作狼狽へたか。
この酒屋に駕籠立てゝ親方にもお茶上げい。休む所で休みもせず。コリヤ奈落の底まで昇き込むかい。地性根を付けいと悪談に。先肩もひやうまつぎ。則ナアニ馬鹿つくすやら。汝と相棒するが最期。定付の立場でも氣に入らねばすつとこな。酒屋さへ見りや何度でも。休みたさうな面付。それといふも飲みたいから。どうで汝は聞及んだ八つ目の大蛇の再来か。地酒呑童子の眷屬かいけない酒好きと競合ひくヤットコ。フシ駕籠おろせば。地サアくお休みくくと亭主が詞に駕籠の垂。上げて床几へ歩み寄る十河額の東武士悠々と押直り。則ナニ後肩の者これへ参れ。最前汝に云付けたは。急用のある身どもなれば立場をぬいてほつ付けよ

と。云うた通りに精が出た極めの外に褒美をくれる。聞けば汝酒好きとやら。亭主。ソレ彼めに酒を飲ませよと。地降つて湧いたる幸ひは。得手の好物嬉然と。笑を含んで駕籠の錢。戴きく兩手をつき。則エ、適れな侍様。極めの外の褒美には五十三増しの錢。下さる所を酒と出たは。又違うたものぢや大將々々。何と仁作よこれ見たかと。地云ふを打消し相棒仁作。則申し旦那。結構な御意なれど。ア同じ事なら地餅がよい。酒に優つた餅の徳。年の始も鏡餅。重ねて神の二柱。或は茶粥の柱とも腹の減ること。フシ遅いなり。則第一駕籠昇に酒飲ますは。婢に地黄を吞ますも同然。何處ぞの程では乗手の身に怪我の出来るは知れた事。酒をとんと止めにして。ナント餅になされませぬかい。餅になさるが上分別と。地

の。フシ食争ひと見えにけり。地侍は苦笑ひ。則ホ、ウ其方にも望次第何なりと仕度致せ。ソリヤ有難い御意が出た。シタガハア悲しや。この店には酒御り餅はなし。ヨット力を落すまい。堤の餅屋も此方の出店。後肩殿はあの壺から。お指圖次第に飲んだがよい。地サアくござれと亭主が案内に相棒は。おのれ存分食ふべしと旦那へ目禮機嫌取り。五文取らうとフシ急ぎ行く。地後肩は立上り勝手知つたる賣場の酒。有合ふ餅を盃に杓からてうどと注ぎ移し。則然らば旦那たべます。コリヤ見事ぢや。餅で飲むか。何ぞ肴をくれたいなア。ア、いえくお肴は持つて居ります。地先づ一口と角飲にがぶくくと一息つき。腰の胸亂引明けて取出す蕃椒。則コレ旦那御覽じませ。肴はこれでよござります。ア、何とやら。フ、それよ。榎木も紅葉しにけり蕃椒

この紅葉をお肴と。地一口食うてぐつと乾し。阿エ、心地よい。コリヤたまらぬわい。申し旦那。ちとお願ひがござります。ム、願とは何事ぞ。ハイ、いやモウ外の事でも御座りませぬ。もう一つこれでたべませうかと申す事ござります。ハ、ハ、ハ、ハ、なになに其上をまだ飲むか。ハテ扱々殿しい上戸だな。何程なりと勝手にせよ。コリヤ有難いと立上り。地手酌のはかり思ふ儘。てうど注いで。阿へ、ハ、又たべます。今度はもう一息にと。地榊引か、へ蟒蛇が瀧の流を呑む如く。ア、ア、ア、ア、呆れ顔。阿エ、忝い命。まだこれらが酒なれど如何にしても無作法千萬。マアこの邊で入れませう。ハア扱と。ヤ慮外は御免。ちとろく、とやりませうと。地芝にころりと耶の。枕いらすに早や駈。ア、仙人界も斯くやらん。地時刻移れば侍は立上つて身

拵へ。ア、用意の内に、都路を東の方へ急ぎの武士。顔見合せて。阿貴殿は八藤軍治殿。コレハ、曾平殿と。地時の挨拶双方が互に禮儀事終り。八藤軍治聲潜め。阿貴殿の御主人大江入道殿。豫て鎌倉時政公へ御内通の忠臣。京家にては出頭の入道殿鎌倉へ内通とは神も知らぬ謀。相互に三日目に逐一の御文通。定めて貴殿も。此方の主人へのお使ならん。いかにも、仰の通り。主人大江油断なく京城内の爲體。萬事具さに申上ぐる。此頃京都頼家公には。諸國の武士を狩集め密々の評議あり。其儀についての御使。幸ひに途中の對面。雙方の状を取換へ一刻も早く歸國せん。地ホ、尤もと兩人が互に密書の箱入替へ。懷中して立上り。鬼山曾平あたりを見廻し。阿イヤこれさ軍治殿。兩人の外人なしと。大事の物語。見ればあれに臥したる下郎。何者やらんと尋

ねれば。ホ、御不審は尤も。彼めは拙者を當所迄昇いて參つた駕籠の者。食ひどれてあの通り。イヤもうたはいもない下司下郎。氣遣あるなと聞きもあへず。成程熟酔の體なれど。下郎ながら彼めが人相逞しい生れ付。茅にも心置く時節事漏れては一大事。地拙者よろしく計らはん。コレかうくと八ッ藤に。噺けば打領き。寝入りし下郎が側へ寄り。耳近く聲張上げ。阿ヤイ、コリヤ駕籠の者。用事がある目を覺ませと呼はる聲。地ウンと寢覺の醉機嫌。阿エツフウム、何方かと存じたら。最前のお侍様。エツフウム、まだこりや飲めと云ふ事ぢやな。イヤモまつさら一人は飲めませぬ。ちよつとお間を頼みましようかい。サアおさしなされませ。地寝ても覺めても酒の事。鬼山はつと寄り。阿イヤコリヤ下郎め。汝が名は何といふ。何所の村に住居致す。ハイ。ハ

テ變つた事のお尋ね。我等住居は何所とも定らず。この街道でこんもりと。よう茂つた森の分は。慮外ながら。拙者が寢所。又名がお聞きなされたくば。本名は。雲助。又かへ名が吾助。飲む事は二斗。三斗。まだ其上もたべます。によつて此頃は名が變り。四斗兵衛。くくと何所でも申します。ヤ又ほんに。酒に於ては。適れの手柄者。どなたでも叶ふまいと。地半分いひさしとろく眠り。軍治立寄りヤイヤイ。目を覺さぬかと引起せば。ワット合點ちやくく。フウム、くくと仰やる。我等に着を致せか。イヤもう私大無器用者。観籠昇く事と酒飲むより。外は何にも存せぬちや。シタが何ぞやりたいが。ホンニ此間子供等が。街道筋でうたふ歌。覺えてゐたが。ヤてんほのかは。やつてのけよかい。おまん股ぐらへ太々神樂が飛込んだ。まだ鈴振つて

跳込んだ。ハ、ハ、ハ、と。地餘念なさ。鬼山背つてヤイコりや下郎め。詞妄言いはずときつと聞け。格別に其方に頼みたいき仔細ありと。地聞いて四斗兵衛起き直り。詞私にお前方が頼みたい仔細とは。ヲ、ヲ、其方が命がほしい。エイ。イヤサ其方が身體をくれい。エ、ヲ、驚きは尤もく。只今此御方と。主人の密事を談じ合ひ。話し終つて後を見れば。酔臥したる體なれど兩人が不覺の第一。たとへ密事を聞かずとも此儘に捨置いては。我が後日の過り。是非がないと諦め。命をくれよと地聞く中に。四斗兵衛は猶吃驚。鳥様子聞く程臆がつぶれ。興も酒も醒め果てました。成程左様に仰有るからは。定めて譯がござらうけれど。何にも聞いた覺もなし。又私には嫌もあり悴もあり。今年八十三になる母じや人もござります。なんぼ雲助致しても大切なこの命。御免

なされて下されと。地哀れを作る空とぼけ。ヲ訛びるより外詞なし。地軍治聽つてヤアどこへ。詞最前住所を尋ねし時。所々の森に寝ると云つた。スリヤコレ汝は知れた宿なし。絶體絶命覺悟せよと。地刀ひらりと拔放せば。わつと飛退き。イヤそれから仰有りませ。私が申す事も。マア聞分けて下さりませ。最前家がないと言うたは。酒の上の出放廻きつと家もござります。ア思へばく此様な。無法な事に出合ふのも。悪い星が當つたのか。何にもせよ此身の因縁。さつばりと諦めて。命は上げますが。只今も申す通り。今年八十三になる悴や。六つになる嫌にも暇乞。ちよつと歸して下さりませと。地退出するしる遊さじと。眉先かけて一刀切つたか飛んだか古井戸へ。眞逆様に落込んだり。鬼山すかさず手頃の石片古井戸へ。打込みく熟と見。詞モ

ウかく仕つたら氣遣なし。思の外脆い奴。御互に安心と。地八ッ藤も刀を。フシ鞘に納め。詞存じも寄らぬ下郎にかゝり思はずも時刻延引。これよりは夜道をかけ。國元へ急がんと。地猶も何かを談じ合ひ。

互に禮儀兩人は、フシ京と東へ別れ行く。地始終の様子最前より木蔭に窺ふ鹽賣長藏。差足して歩み寄り。井戸へ落ちたる下郎こそ只者ならず訝しく。試みせんと豫てより仕込む杓に穂長の鏑。井戸に立寄り逆落しぐつとつゝ込む手練の手答。

透さず拔取る鏑の穂先。ほつくと折れしはさてこそと。躊躇ふうちに井戸よりも。ぬつと出でたる件の駕籠舁。上るや否や發止と打つ。穂先の手裏劍長藏は眞俯向けに倒れ伏す。四斗兵衛は見向もせず。何か心に打領き。のさり／＼と懐手、フシ村道さして行過ぐる。地跡に長藏生死の鏑の穂先は手に受止め。むつくと起きて

身繕ひ。早や暮れ。渡る空の色。曲者が行く道筋を。遙に見やり見定めて跡を。慕うて。三更追うて行く

第六

地所の名さへ醒が井といへど朝夕酔臥して。酒代に諸色諸道具まで。オクッ酒屋へ。かき出す駕籠舁あり。名は四斗兵衛が内一ばい。ふんぞり返る。フシ高枕。地側に女房が賃仕事。小遣だけを紡出す。ぶんぶ車も世渡りも。廻りフシかねてぞ見えにける。地四斗兵衛は大欠伸。身中さすつて起上り。詞エ、耳のはたでふう／＼

ふうと。あつたら夢をさましくさつた。目覺しに一杯せう。一走り行て買うて來いと。地奈良漬臭い嘆氣しながら。まだ飲みたがるフシいげちな上戸。地女房仕事の手を停め。詞ヲ、たつた今その徳利を飲乾して又かいな。買ひに行こにももう

値がござんせぬ。錢が無か汝が襦袢ぶち殺して。買うて來いと。地無理、邪も男の權柄。詞サアわしが單衣は惜まねど。その様に飲ましやんしては。身の爲になるまい。ちつと嗜んだがよいわいな。又男の咽喉締しをるがな。おのれ食は食はいでも。酒が飲まずに居られるものか。小言いはすと買てうせう。行かぬかい。コリヤ頼む。何卒一杯飲ましておくれと。地ハルフシ猫撫聲も飲みたさの。餘りの事に女房は。フシ呆れて詞なかりけり。地折から表をひよか／＼と通り過ぐるやつこらさ。四斗兵衛見るより飛んで出で。詞申し／＼可内殿。權平殿申し／＼と地呼びかけられて立戻り。詞今呼びかけたはお身か。ハイ私でござります。私だといふそ様は誰だ。誰ぢやとは外々しい。扱々先日は甚い御馳走に預つて。忝うござります。マア／＼お入りなされませと。地いはれ

て合點の行かぬ奴。ッシ無理に伴ひ内に入
れ。爾それから一寸お禮に参らうと存じ
たれど。貧乏暇なしでお禮さへ延引。女
房ども彼方へようお禮申してくれ。此中
あなたで結構なお料理を振舞はれ。其上
結構な御酒を強ひられ。それは〜近年
の御馳走。お禮申せ〜と増減多ッシ無上
に悦べど。地根から覚えのない奴。爾イヤ
これさそりや何の事だ。俺はお手前に何
にも振舞うた覚えはないぞ。ハテ奴物覺の
悪い。あれ程振舞うて置いて。エ、こり
やその振舞返してもせうかとお辭儀ぢや
な。イヤモ御覽じます體なれば。振舞返
しとしては致さぬが。御酒は一つ上げま
せうかい又此方の嬢が悪い辭で。人様に
振舞はれて居る事がきつい嫌ひ。嬢が心
休めぢや一つ上つて下さりませ。嬢一走
り酒買うておぢやらぬかと地いはれて否
とも客の手前。不承々々に女房は。ッシ

徳利下げて出でて行く。地奴はなほも不
思議な面付。爾俺に酒飲ますとはどうや
ら嬉しい事だんべいが。振舞つたなどと
は白痴覺のない事ども。コリヤ酒の奸陽
だないかよ。エ、うまい和郎ぢやわいの。
何のあり様に酒一杯振舞はれた事はなけ
れども。あんまり嫌めが飲まさぬ故。かう
いふ手段を廻らしたは彼奴に酒買ひにや
らうばつかり。ハア、それでよめた。こり
や俺を餅のかたではない酒のかたにした
のだな。それ程に飲みたがるお手前も飲
助だな。飲助の段か名さへ四斗兵衛。何だ
四斗兵衛えらい名だな。これも初は一斗
兵衛であつたれど。段々飲上るに付き二
斗兵衛と立身し。三斗兵衛と出世し。追付
け薙被りまで飲上るといふ心で。今の名
は四斗兵衛。何とえらい飲助であらうが
の。こりやきつい。一斗兵衛から四斗兵
衛までの立身。其位では今の間に。五斗

兵衛と名を萬天に上げるのであるべい。エ
あやかり者めとッシ話のうち。地徳利ぶ
ら〜女房のおまき。イヤ待兼山の不
歸。鳴く音はぼぞん缺徳利。マア客人から
と差出せば酒はあつても肴があるまい。
奴様の御馳走に。湯奴なりとして上げう
とおまきはッシ勝手へ入りにけり。爾湯
奴とは忝い。出来るまで一杯せうかい。
エ、この和郎も近渴。そんならそれから
お始めなされエ忝いと地茶碗引受けどぶ
〜〜。一口二口目を飲め。爾エ、
酒ぢやないこりや水だ。何ぢや水ぢやと
地茶碗にうつし。爾ほんに水ぢや。コリ
ヤ男をやり仕事にかけをつたな。何と一
つ上つたか。この手でさい〜こちの人
に。騙られた振舞がへしの御馳走。奴様
よう上つて下さんしたと。いはれて月夜
に鏡姫奴。爾テモ酷い目にあはしたな。
コリヤ湯奴ぢやない水奴だ。エ、あたま歩

の悪いと嘆き、フシ吹き立歸る。地引違うて来る男。平樽片手に肴籠。詞申し一寸物が尋ねたうござります。何所ぞ此所に堺屋の三右衛門様といふのはござりませぬかと。地聞いて女房が。詞イエ〜爰らにそんなお人はござんせぬ。ハア、どこやら此邊ぢやと聞いたが。そんなら外を尋ねて見ませうと。地行く酒樽に目の付く四斗兵衛。詞コレ〜待たしやれ。こなた其樽着どこへ持つて行くのぢや。サア今尋ねる堺屋の三右衛門様へ。アノその酒をやるのか。よし〜。コレその堺屋の三右衛門といふは爰ぢやわいの。エ、そんなら内方でござりますか。爰とも〜即ち三右衛門といふは俺ぢや。これはしたり。左様ならあなたが躰様でござりますか。媒人蠟燭屋善兵衛申します。追付け嫁御様お越しでござります。これは少分ながら躰様へ嫁御のお土産でござ

りますと。地樽と肴を差出せば女房吃驚。詞コレ〜粗相なそんな事はこつちに覺えは。シイ〜。エ、すりやこれが嫁御の持参か。コレハ〜御叮嚀な。女夫の中に氣を張らいでよい事を。祝言の盃は後程。先づ手附に一杯致さうと。取出す茶碗。コレ滅相な。其酒飲んで嫁御とやらが爰へ見えたら。どうせうと思つて。ハテどうせうの斯うせうのと。高が女房に持ちやえいぢやないか。アノわしといふ女房のある上に。ヲ酒さへ持つてくりや幾人でも女房にする。酒戻はせぬものぢやと。地茶碗についてぐつと一飲み。アレ〜嫁御がもう爰へと。いふ間表にフシ風薫る。地二八の花の振の袖。ハルッン町屋にあらぬ。ぶつ裂き羽織。大小の拵へも利方を好む立派の侍。誰ぞ案内頼みたしと。昔なふ聲におまきがむつと。詞門違の嫁御様。あたようお出なされたと。

地嘆く女房四斗兵衛は。酒が仲人の俄聲これへ〜にフシ打通る。地並々ならぬ其勿體。詞ヤアお前は兄様。コレ〜私の縁は縁。今日これへ参つたは。四斗兵衛殿へ折入つて頼みたき仔細あつて。嫁と名付けしこの御方は。鎌倉の大將北條家の御息女。頼家公へ縁邊を取結びし所。御若氣とて三浦之助にわりなき戀路。京鎌倉和睦の程と思ひし事。却つて破れの端となり。時姫の首討つて渡せと京都よりの難題。時政公も不義の娘。親子の縁切つたりと鎌倉へも入れられず。御身一つの御難儀は。この片岡が一身に迫り。地様々思慮を廻らせど。何を云うても火急の沙汰。先づ御姿を隠し置き其上事ははからんため。魂を見届けてお預け申す四斗兵衛殿。くれ〜頼み存すると餘儀なき體におまきが悦び。詞親兄の許しもないに我儘な男選み。憎い奴不義者と。

お手討に逢ふとても無理とは思はぬ身の
淫奔。地悔みは千萬返らぬ昔。そのお叱
りもなう親身のお頼み。詞お氣遣ひ遊ば
すなど。申したけれど氣の毒は。酒放心
轉々する夫の氣質。コリヤやい〜。二
言めには酒々。男を打込む才狂め。魂
を見込んでとあるからは。いかにも四斗
兵衛が。命にかけてお匿ひ申しませう。
イヤ合點が行かぬ。その氣ならよけれど
も。酒飲ましやんすと忽ち變るお前の心。
ハテお匿ひ申すうちは何年でも禁酒禁
酒。ハテ匿ひ了せたら。其時褒美に四斗
樽四五挺。マアそれ迄は臭もかぢぬ氣。
ヲ、出かさしやんした〜。お前さへ其
心ならアイ兄様。何時までなりとお匿ま
ひ申しませう。地その代りに夫の身の上。
よろしう頼み上げますと。夫婦が詞に片
岡悦び。詞妹が縁につれ姫を匿ひくれら
れうとは。町人ながら頼もしき心底。首

尾よく致さば妹諸共。鎌倉へ同道致し拔
群の知行取る侍に取持ち致さん。そんな
らアノこちの人を。侍にして下さんすか。
コレ悦ばしやんせ。知行取りにするとい
な。おつとよし〜。知行取りになつた
ら嫁よ。酒買ひに行くも乗物に乗せてや
るぞ。アレまだそんな事ばかり。地夫の
出世もお姫様。ようお出遊ばして。下さ
りましたと追従も。フシ夫思ひと知られ
たり。地時姫も顔を上げ。不思議の縁で
夫婦の業世話になる身は蛸蛸の。あるか
なきかの憂き命。よまにとばかりあと云
ひさし。顔さし入るゝ懐のフシ内や涙の
淵ならん。地片岡座を立ち夫婦に向ひ。
詞兩人に預くる事此上の安堵なし。必ず
人に氣取られぬ様隨分心をつけれよ。
イヤモこの四斗兵衛が預るからはゆつと
りと。通し駕籠に乗つた様に思うてござ
りませ。是は〜忝い事によらば引返し

てお迎に。ハテ御念に及ばぬ御勝手次第
地然らばお暇おさらばと。姫にも禮儀片
岡はオウ元來し。へ道へ。フシ立歸る。地あ
とに夫婦が氣もいそ〜。詞コリヤ嫁よ。
きつう鏡口がよくなつて來たわい。コリ
ヤまあちつとお神酒でも上げぬかい。ア
ノたつた今禁酒ぢやというてもうかい
の。ほんになその禁酒をとんと忘れた程
にのハ、ハ、ハ。したが飲みつけた酒飲ま
ずにおたら。氣が盡きてたまるまい。イヤ
俺が氣の盡より。お姫様がア嘸御退屈に
ござりましょ。ソレお慰に酒の糟なと買
うて來て進ぜぬかい。ヲ、嗜ましやんせ。
何のあなたへそんな物。御不自由も暫し
の中。地體てあなたの思召す。戀人様に逢
坂山のさね鶴。人に尋ねてついお出でご
ざりましょと、フシ諫め申せば。時姫も。
詞よしなき戀に絡まれて。我が身ばかり
か片岡に。苦勞かけるも自ら故。長地夫

婦の手前耻かしと顔は照り葉におく露の袖にひたせる。有様に。おまきも詞涙ぐみ。フシ暫し應答もなかりけり。地折から来る鹽賣が上下ため付け酒樽を。肩にぶら／＼足音の。中にもしやとおまきが氣轉誰が見咎めても大事のお身。見苦しけれど奥の間へと。女房に誘はれ。フシしづ／＼立つて入り給ふ。地表に鹽屋が頓狂聲。詞駕籠昇の四斗兵衛殿とは妾でござんすかと。地ずつと這入つて顔と顔。詞ヲ、こな様が四斗兵衛殿かい。つひに逢うた事も。又近付でも。内儀様は留守でござんすか。ア、嫌は内に居ますが。貴様マアどつからござつた。イヤおりや鹽賣の長藏といふ者でござんすか。ア、鹽商賣も身の廻りに張込んで。あふこつちやござんせぬわいの。それで資本のいらぬ駕籠昇がしたさに。弟子になりに來やんしたマア近付のため少分ながらこの一樽。

寢酒に飲んで下されと。地酒樽なほせばにつこり笑ひ顔。詞ハ、こりや忝い。酒さへ貰へば何處からでもようござつた。したが駕籠昇の弟子入りに上下とは。ア、裸で茶の湯に行く裏ぢやの。そしてこりやきつい氣の張りやうぢやが。是もまた水ぢやないかや。ハテそんなぢやない。小半酒や八文酒飲みつけた口には。ちつと重うて飲みにくからう。並酒でもないこりや鎌倉山。ヤ何と。サア鎌倉山といふ。大切な銘酒ぢや程に。へ、味はうて飲んでもらひましょかい。ム、ムン飲んましょ。如何にしても云ひ様が面白い。又この四斗兵衛が飲むからは。鎌倉山でござらうが。富士の山でござらうが。たとへ日本國でもコレ此茶碗に引受けて。いでと思はゞぐつと一飲み。マア試に。一杯致そと。地樽の口から。どぶどぶ／＼。お辭儀なしに下されると。フシ

引受け／＼續け飲み。詞こりや見事。さらばお着仕らうと。地藥菴解いて黄金作。詞太刀魚の作物粗末ながらと差出せば。ム、こりやお着が肉過ぎて。我等ちつと食べにくい。この着はマアお預け申さうかい。イヤお辭儀には及ばぬ。太刀魚よりはコレ此鎗の鋒先。嗜みこなした齒節の丈夫。適れ四海の軍師。サ醉狂人と見極めてのお着。受けてすつぱり切つてもらひたい。ム、切れとは何を。時姫の首。ヤ。たつた今匿はれた時姫。その首が貰ひたい。がよもや貴様え切るまいの。ソリヤモ何より心易い事。切つてやろ／＼。何の俺が首ぢやなし。人の首の一つや二つ。望なら目の前でと。地又引受けて。フシこぶ／＼。詞然らば着も。ハテ志ぢや戴こかい。時姫の首。それも合點切つてやろと。地初の心酒故に。打つて變つた詞詰。フシひと癖者と知られたり。地始

終一間に聞き居る女房走り出で。何コレ
四斗兵衛殿。兄様に詞番うたごなたの出
世。知行取になる事も酒で忘るゝたわい
なし。いかに酒に酔うたとして。お姫様の首
切ろとはあんまりな人非人。コレそこな
人。酒の酔を相手にせずと。とつと去
んでもらひましょと。地聲震はして腹立つ
女房。夫は酒に廻らぬ舌つき。地ヤイソ
ソ、そげめ。知行々々とぬかすが何の五
萬石や十萬石。此酒に代へらるゝものか
い。それで姫の首討つてやるが。ナ、
何とした。ム、すりやどう有つてもお姫
様を切る氣ちやの。ヲ、切る。それ聞いた
らもう爰には置きまされぬ。わしが供し
て兄様へ手渡しすると。地一間へ駆入り
かひくしく。姫の手を取り立出づる。地
盡きせぬ縁か見合す顔。ナウ懐しや戀し
やと。ヌエ立寄る。姫を抜打ちに首は前に
ぞ落ちにけり。ハア、はつとおまきが氣

も半亂。鹽賣突立ちヲ。連れ四斗兵衛
出かされたりと云捨て、フシこそ驅りゆ
く。地あとに女房が聲をあげ扱もく痛
はしや。お命を助けうため心を砕いて兄
様が。こゝ迄預けに見えたもの。其時つ
れなう預らずばかういふ事は出来まいも
の。佛頼んで地獄の牛頭馬頭。もし今に
でも兄様がお迎に見えたらば。わしや言
譯がないわいの。いつを殺してくと。夫
に取付きしがみ付き恨み敷けば。ころり
とこけ。フ前後も知らぬ高舩。地かくと
も知らず片岡が禮儀の上下折目を正し。
御迎の乗物吊らせ悠々と戸口に佇み。同
ヤア家來共。云付置きし物この家へ持參
し。案内せよと詞につれ。地衣服大小白煮
に。輝く兜は龍頭あたり。フシ狭しと並べ
置き。地片岡しづく内に入り。同誠に
雷の落ちくる急難。事故なく相濟みし故。
早速姫の御迎ひに參上せり。是と申すも

四斗兵衛殿。御匿ひ下されし故。助かる
まじき姫の命助かりし命の親。直に鎌倉
へ同道致し時政公へ御目見え。契約の通
り只今より武士に取持つ印の音物。地御
受納あつて姫諸共。御出立下さらば此上
の悦びなしと。フシ感慙に述べければ。地
女房あるにもあられぬ思ひ。兄が脇差抜
き取つて自害と見ゆるを片岡押へて。ハ
テ心得ぬこの有様と。又物撈取り眼を配
り。ヤこりやこれ時姫君の御死骸。何者が
手に掛けし。ア、しなしたりくと。地齒
を食ひしげる怒りの面色。同妹が振舞と
いひ。扱は四斗兵衛めが仕業よな。汝下
郎め主君の敵。一分試と切付くる。地心
得むつくと起上れば。いらつて切込む刀
は稻妻。ごなたの早速は飛鳥の翔。勢ひ
雲に龍頭の。兜を片手に引掴みハズミ間
を指して驅込んだり。同ヤア卑怯者逃ぐ
るとて逃さうかと。地續いて驅行く向う

に妹。阿ッ、お腹立は道理至極酒故亂る
る心を知り。匿うたは私が科。夫よりマ
ア先へ私を殺して下さんせ。さうない中
は奥へはやらぬ。ヤア邪魔ひろぐなど引
摺りのけ。地驅けゆく鎧に又取付き。や
らじ放せと、ッ争ふ最中。阿表の方に大
普聲。江州醒が井の住人。和田兵衛秀盛
殿。御用意よくば坂本の城へ御入城。三
浦之助義村御迎ひに伺候せりと。地呼は
る聲は以前の禰實。初には似ぬ勇士の扮
装。せきにせいたる片岡も様子。ッ如
何と躊躇ひ居る。地女房不思議立向ひ。
阿坂本の城へ誘はんとは。いつ味方させ
何時の契約。殊には隠す夫の本名。和田
兵衛秀盛とは。ホ、陳平韓信が腸を探り。
市人に妾をやつし隠されても。美名は四
海に、ッ芳ばしく。地宇治の方の仰せを
受け。何卒して味方に招き。雌の劍を授
けんと。妾をやつし徘徊すれども。阿素よ

り面體見知らぬ某。如何と心を碎く中。
中仙道にて不思議に出合ひ。我が姓名を
記したる。手鑑を以て試せし手練。和田
兵衛ならで外に及ばぬ稀代の手の内。地
何卒味方に頼まんと思へどたよる手段な
く。如何と案じる時も時。阿時姫君を匿
はれしこれ幸ひとこの家に來り。首討つ
て渡されよと渡せし劍が即ち雌の劍。我
が心を推量ありしが。事故なく受けられ
しは。味方に加はる印の剗印。地此上は
片時も早く。打立ち給へ御供せんと、ッ
高らかに。呼はつたり。地片岡聞くより
猶もせき立ち。阿ヤア京鎌倉と引別るれ
ば。我は鎌倉時政方。京方の奴輩一人も
生け置かれず。其上眼前姫の仇。地何所
までもと驅けゆく一間。隔の戸障子踏み
開けば。内に四斗兵衛悠々と。ッ襦袢に
代る肌著の小具足。唐縫したる陣羽織に
十五頭の小手脛當。太刀と兜を兩の手に。

床几にかゝる有様は實に。百萬騎の軍帥
と、ッ骨柄ゆしく見えにけり。和田兵
衛兜を座前に直しいかに片岡。時姫の身
に代り殺されし其娘は。定めて貴殿の息
女ならん痛はしさよと悔みの詞。阿ム、
すりや某が娘と知つて。ホ、ホ、敵の氣
を見て士卒を使ふこの和田兵衛。況んや
一人の女童。如何程に伴ればとて。親子
の親しみ上下の人相。一目にも見違ゆべ
きか。頼家公に縁邊は切れたれども。不義
の科ある時姫君。それ故娘を身代りとし
時姫の心の儘。地三浦之助に添せんと、ッ
心を碎く片岡殿。その忠義を感じ入り。阿
不便ながら殺害致せば。時姫といふ名は
消えて。今は憚る所なし。御迎の乗物に。
忍びまします時姫君。地早や、是へと
和田兵衛が。詞に片岡陳じもならず表の
方。乗物あくれば時姫君こけつ轉びつ住
の江が。死骸に取付き縫付き親の許さぬ

戀路故。かねて亡き身と思ひしに。自らが命に代つて死んでたもつた住の江。嬉しいとも忝いともいかで詞のあるべきぞ。只恨めしいは造酒頭。かくなる事を露程もなど知らしてはくれざりし。知らばやみく此人を歸すまいもの味氣なやと。恨みかこちの涙川。袖に滯なすばかり。詞ヤア住の江とは紛らはし。其死骸は時姫君さいふ汝が我が娘。ナ御合點が参つたか。親に優つた娘が忠義。犬死さして下さるなど。地目をしばたく片岡が。心を察して妹は三浦之助に打向ひ。時政公の御息女といへば添はれぬ敵味方。兄様の娘御に何の障りも味方同士。申し御了簡とはいふを打消し。詞ヤア味方とは汚らはし。鎌倉方へ裏返つたる不忠侍。その娘に何の縁組。某に心を寄せし時姫君。首討たれよと望みしも。敵の縁に引かれぬ潔白。是非時姫を娘とし此

三浦へ送りたくば。掣引出には汝が首。覺悟せよやと詰め寄すれば。ヤレ早まらねた三浦之助。地命を捨て、名を揚ぐるは誰しも武士の好む所。名を捨て、忠義を立る造酒頭。其證據こそ此兜。これこそ將軍宣下の御寶。たとへ頼家軍に打勝ち。四海残らず押領あつても。此兜なき時は將軍宣下思ひも寄らず。詞そこを計つて片岡が。鎌倉方へ裏返り。不忠の名を取られし故。念なう兜を奪取り。某に渡されしは。名を捨て、忠義を立つる古今の忠臣。地此兜手に入るからは。これより坂本の城へ馳向ひ。詞鎌倉勢と分目の軍。地たとへ時政。何萬騎にて向ふとも宇治勢田に壘を構へ、變に應じ機に乗じ。或は顯れ或は隠れ。千變萬化に寄手を惱まし。大將に舌卷かせんはこの。和田兵衛が方寸にあり心安かれ方々と坐ながら。謀る。ン軍師の軍配。詞ホ、驚き入つた

る秀盛の明智。かゝる軍帥味方にあらば。軍の勝利疑ひなし。地我はあつても益なき臣。今こそ三浦の望に任せ掣引出進上せんと。いふより早く差添腹に突立つれば。ナウ悲しやと姫妹。縋り歎くを押退け。突退け。詞京方には誰々と。指折の數にも入りし某が。暫くにては鎌倉へ裏返つたるその悪名何を。以てか雪ぐべき。味方の内にも追従表裏の大江の入道。某再び城に歸らば。豫々より鎌倉へ。内通したる事どもの。顯はれん事身の大事と。如何なる非道謀計を以て。味方の心を迷はさば。區々なる人心。我疑へば人疑ふ。人氣和せざるその時は。軍の勝利思ひも寄らず。そこを思うてこの切腹。死後にも片岡は。地返り忠せし不忠の臣と。末代に名は汚すとも。一心五臟に忘れぬ忠義。何卒名ある軍帥を。御味方させんものと。詞心當どは和田兵衛殿。妹が連

添ふと聞きし幸ひ住所を尋ね。我が志を立てん事。此人ならでと娘を誘ひ。存念を立てたる某。妹悔むな。時姫君もお歎きなく。御身に代る娘めが。志を立てたべ。地不便やお主のお爲と聞き。悦び事は悦びしが。とても事の事に男の子に生れたら。戦場の一大事。御馬前の御用に立つて。名をあげる討死したら。父上迄がお嬉しかるが。女子の身の附甲斐なさ。父様。休へて下されと。いうた時は出かしたと地褒むる事さへ胸に迫り。同一言一句も出なだに。親に優つて先に立ち。地親は後れて歩む足。此家へ来る道々の。堅牢地神の頭には。さぞ片岡が踏む足が。大磐石と應へやせん。重き忠義に代へたる娘。よう死んでくれたな出かしたと。鍛ひに鍛ひし忠義の身體も。子故の鞆に吹立てられ。咽ぶ涙は熱湯の湯玉。スエテ逆る。如くなり。地妹は正體泣沈みよく

よく薄い兄弟中。たつた一人の姪子にも名乗合ひもする事か。果敢ない別れ悲しやと歎けば共に時姫君。詞とても添はれぬ敵同士。疾うからわしが死んだらば斯うした憂目は見まいもの。どうぞ添ひたいく々と未練な地心の迷ひから。親子の衆のこの最期。コレ勘忍してたもいのう。思ひ切らうと思つても儘に。ならぬが戀路の因果。詞つれない命死後れ。地面目ない耻かしい。叶はぬ戀を諦めて此身の。果は尼法師それがせめての言譯ぞやと。身を裏菊の兩袖に保ちかねたる露涙。詞親子の爲の香花ぞと。地兜を時の香爐に。本アヲ薫らす。煙蘭奢待。詞東大寺の寶物なれば。佛縁に誘はれ地未來の佛果と合す手に又も。涙のヲシ數珠の玉こは。有難き御手向娘も我も。成佛得脱ヲシ只此上は詞三浦之助へ。媒介頼む和田兵衛殿。地ヲ、其儀はちつとも氣遣ひあるなと。兜

を取つて三浦に向ひ。詞聲引出と望みし首。此兜ゆゑ命を捨てし片岡なれば。一心五體は兜に残る。これを引出に姫の事。氣強きばかり。武士とは云はぬコリヤ地情も武士の道具ぞと。渡せば取つて三浦之助。此上何か辭退せん。さはいへ勝利を得る迄はお預け申すおまき殿。詞家を出る時妻子を忘れ。戰場に及んで身を忘るゝは勇士の常。地もしも運盡き頼家公著し。君に代つて討死せん。名香薫る首取りしといふ沙汰あらばこの三浦が。討死せしと知り給へと詞は末に。あふ坂や關の清水と湧きかへる。涙ながらの暇乞離れ。がたなき初戀にほだしは。見せぬ若武者を。伴ひ出づる軍の首途。羨ましげに仰上り。見送る手負を介抱し共に。見送る姫女房。戀と無常を見捨てゆく武士の。道こそ。三葉は是非もなき

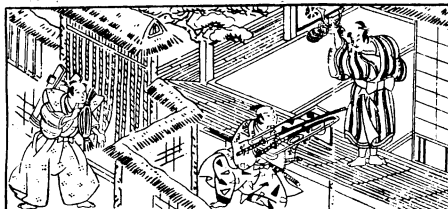
第七

地名にし近江の景色も今。戰場と名古の
 浦。源の頼家公坂本に居城し給ひ。家々の
 旗指物比叡風に飄へり。霜に輝く弓鐵砲。
 陣所の篝火天を灼し要害。マシ殿しく守
 り居る。地御城預り佐々木四郎左衛門高
 綱。城中隈々つまりく。寒夜を厭はぬ
 夜廻に。心を配つて立歸れば。地物見の
 軍侍新開次郎御前に畏り。詞某只今遠見
 致せしに。寄手は比良に陣を取り明日敵
 の大將は。御舎兄佐々木三郎兵衛盛綱
 殿。未明に寄來る體と見え。地數萬の軍兵
 弓弦をしめし馬に。鞍置き鐵砲火矢の用
 意最中。御油斷あるなとマシ述べければ。
 關ヲ、出かしたく。兄盛綱の軍立心憎
 し。さあらんと某も。豫て手當を仕置き
 たり。猶又汝諸軍に其旨觸れ知らせよと
 追立やり。地其身は軍慮に他念なく暫時

の暇も机。眞草行の堅からぬ。愛に愛
 持つマシ間の襖。地物靜かに押開き。妻の
 篝火一子小四郎の手を引き立出で。詞こ
 れはくまだお休みなされず。夜蕨合
 戦の御工夫。只今聞けば明日より矢合せ。
 寄せ來る敵は兄御盛綱様。他人より晴の
 合戦。此子も今年十三なれば。地今夜鏝
 の着初させ。父上の御供して。初陣に手
 柄がしたいとたつての願ひ。お聞届け遊
 ばして小四郎の初陣お許しなされ下され
 かしと。マシ母の。願に小四郎も。詞明日
 父上の。戰場への御供を。御赦免あれと
 稚氣に。思詰めたる顔色を。父も頷き尤
 も尤も。詞主君へ忠義に魂を渡し。我が
 子の年をはつたと失念。流石は高綱が子
 程あり出かす。成程そちが願に任
 せ。明日の軍には我に引添ひ。初陣の手
 柄を見せよ。サア嬉しや父御の得心。其
 方も悦びや。地鏝の著初に此母が手づか
 ら縫ひ仕立てた鏝下。裾丈藍の下染に勝
 つ色見する紅襦袢。母が手を添ゆるのが
 陰陽和合で著初の故實。此上は作法の通
 り著せてやつて下さんせと。夫婦立寄り
 壽をオウ祝うて。鶴の小手髷當。總角取
 つて打著すれば。父は上帯マシしつかと
 締め。詞連れ武者振。鏝の著ぶり。父御
 にとんと生寫しと。地母の悦び高綱も。
 我が子を見上げ見下して。悦ぶ眼に涙を
 浮め。詞情なきものは武士の身の上。御
 主人の御爲に。明日討死も計られず。命
 は義によつて輕し。汝とても其通り。伯
 父甥兄弟引分れ骨肉の戦ひなれば。敵も
 味方も晴れ勝負。さり乍ら討死するを思
 義とは云はれまじ。千變萬化に軍慮を廻
 らし。身を全うして始終の勝こそ武士の
 肝要。我が采配に付従ひ。未練の働き致
 すなど。地父の詞に小四郎も。鏝づきし
 てゆゝしげに。勇み進みし武者振は。末

頼もしく見えにけり。母は悦び軍配にて煽立てく。詞ヲ、出かしやつた。只今の父様の教訓。忘りやるな。著初の儀式は奥の間で。父様の盃頂戴しや。成程々々。頼家公にも申上げ初陣の門出を祝はん。地篝火來れと打連れて。オケリ一間の。(中へ)シ入りにける。地フシ夜もはや更けて深々と。音は湖水の浪ならぬ。敵か味方が白妙の雪にきらめく陣羽織。武者頭巾に目ばかり出し。後先見廻はし城門を。フシ忍びやかに打敲げば。地豫てぬからぬ佐々木が下知。門番櫓に駈上り透し窺ふ星月夜。喚鐘ちやんと打掛に押取刀篝火が。フシ城門近く走り出で。地注進の者が何者なるぞ。さん候供をも連れず只一人。敵の忍びか内通か何にもせよ名を名乗られよ。何とくと尋ぬる聲。アア騒がしし音高し。斯くいふ我はこの城中の主。佐々木高綱が兄三郎兵衛盛綱。

地弟が顔見たさ竊かにこれ迄來りしと。案内の趣取次に。篝火不審暗れやらす。詞一家は内證明日は互に剣を振合ふ敵の大將。三郎兵衛盛綱殿いかなる術も圖られず。内へは得こそ通すまじ。たつてとあらば用捨はならず。ソレ何れも。防矢の用意。地用意といぶ折から奥の間より早使。高綱様の仰には。兄盛綱様久々の御入り。門を開いて御通しあれ。対面なされんとこの御事と。地聞いて猶しも不審ながら。夫の深い思案こそありつらめ。此上は門を開き。詞御通りなされと申しませいと。地禮儀の詞打掛に小太刀隠してしづくと。油断あら



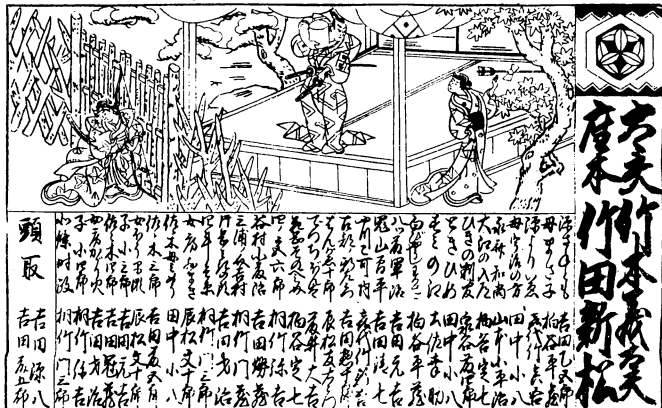
近江源氏先陣館

大義松 竹田新松 大義松

五藤	第九	第八	第七	第六	第五	第四	第三	第二	第一
<p>竹中本義松 竹中本義松 竹中本義松 竹中本義松 竹中本義松 竹中本義松 竹中本義松 竹中本義松 竹中本義松 竹中本義松</p>									

木の門の門くわんか くわつた舜つひめく城門を。開けば盛綱モリノのつししく。地通る客ふり出迎ふ氣配り。互に見合す四つ目結。坐するも針の青曇。上ずんべりの會釋して。詞コレハ珍らしい盛綱様。久しうお目にかゝらねど。何方様にもお揃ひ遊ばし。御健勝の御様子。陰ながら承つて。夫を始め妾が悦び。イヤもうそれは相互。今日も指折つて數ふれば。弟に別れて今年で丁度十三年。其節一子も當歳なりしが。定めて成人したのである。此方にも小三郎といふ同年の悴。見かはすばかりの成人。先だつての合戦には國に殘しおきたれど。此度は母も子も。是非に同道してくれと親子の願ひ。久々一家の對面せねば。餘りく懐しさに參つた。小四郎が成人顔。早く見たい。一目逢はしておくりやれと地世に陸じき盛綱の。詞は二心もあるまいか。どうかかろかと

胸は燦る篝火か。詞成程あなたの仰やる通り。太平の御代なれば。小四郎も伯父御様に。お引合せ申して何角差置きお盃を。頂戴致すが順道なれど。サア儘にならぬは敵同士。どうで明日に初陣に。父御に引添ひ出ますれば。御對面は戰場にて。悴小四郎が小腕の拳。矢一筋射かけませう。それを一家の盃と。地思召して下さりませと。否とは云はさぬ尤もごかし。盛綱返す詞さへ。鶯の間の襖押開き。詞四郎左衛門高綱。それへ參つて對面を仕らうと。地立出づるその形軍の出立引替へて。兄弟因の長羽織遙か。下つて座に直り。詞一別以來御意得ねど。



吉田屋 新松 吉田屋 新松

頭取 吉田屋 新松 吉田屋 新松

兄者人にも御健勝。永々母の御介抱身に餘つて大慶。先だつては由なき詞の論によつて。兄弟の中不和となり國を立退き。これまで疎遠に年月を送りし失禮。全く御免下さるべしと。親兄の禮こまやかに。メエ手をつき疊にひれ伏せば。盛綱も居直つて。阿ホ、音信不通は相互。今日來るは久々に對面が致したさ。又其外に折入つて。頼みたき仔細あつておして推參。これはく兄者人。改つたお詞。身分相應な御用ならば。聞かうぢやまで。先づ以て忝し。頼みたいは別儀でない。今宵密かに陣屋を拔出で。只一人來た仔細は。某今日より心を改め。頼家公へ降參に參つた。何卒御前へ取次がして貰ひたい。斯様にいへば盛綱。卑怯者と思はうがさうでない。明日の合戦は。何れが勝つとも定まらぬ互角の合戦。旗色悪さに降參する三郎ならねど。地つ

くく思へば兄弟弓を引合ふも。武士の習ひとは云ひながら。昔の爲義義朝の保元の戦ひ。正しく天の道に背けば。平治の亂に義朝は長田に討たれ源家を潰し。永く武道の悪名を残す。いづれが討ち討たれても。父尊靈の魂魄。悲しみはいかばかり。阿兄弟が不孝の罪。天より高く。滄海よりなほ深し。それを思へば。何と双が合されう。地今日只今心付き。恥を捨て。兜を脱ぎ。降參に來た此盛綱。骨肉同胞の誼には。頼家公へ御執成。頼入る弟と手をつき。ツツ頭を下げにける。地物をも云はず高綱。すんど立つて入らんとす。阿これさ弟。聞届けておくりやるか。返答如何に引留むれば。地立てたる重藤押取つて。りうくはつしと擲り打ち。こは何事と驚く妻。本笠しつかと先づ待て高綱。阿現在の兄を打擲するは。何故の立腹と。地云はせも立てずはつた

と眺み。阿兄とは推參慮外千萬。凡そ弓取の操はな。善にもせよ悪にもせよ。一度頼まれたる詞を變ぜず。危きを見て命を捨て。二君に仕へぬを道とする事。犬打つ童まで知る所。佐々木高綱が頭を踏まへし三郎盛綱。一旦鎌倉に味方しながら。今更旗色の悪しきを感じて。生面下げで降參とは。よつく腰拔の犬侍。兄弟の縁切つた。それとも御邊誠高綱が兄ならば。その腐つた根性を改め。いよく敵味方となつて。戰場にて四郎左衛門高綱が。首取つて見せうとおいやれ。それこそ誠の兄じや人。有難く存じ奉らん。いつの間はその様な。臆病神は憑きたるぞ。エ、情なヤ口惜しやと。地或は勵まし。或は敬ひ。怒の眼にはらく涙。ヲ、尤も至極。盛綱も返す詞はなけれども。阿御邊は一途に忠ばかり。孝の道に心付かず。此頃我が陣中へ慕ひ來る母微妙。御

館陣先氏源江近

邊がためにも親ならずや。どちらが討ち討たるとも。お年寄られし母人の。御敷きを思遣り。地生きるとも死するとも。

阿兄弟一所にせん爲に。孝行の隆參。聞分けて是非お取次。弟嫁も執成を。頼む地頼むの眞實も夫の心はかりかね。フシ何と挨拶口ごもる。阿ヤア恥を恥とも思はぬ人奇。顔見るも穢らはしい。城内には暫時も叶はぬ。早や出て行きやれと手を取つて。地引出す義心の誠には。咎めん方もあら氣の高綱。阿あかの他人の卑怯者。ぼひ捲つて門を固めよ。無益の事に陣立の。支度延引隙惜しや。地篝火來れとフシ立つて入る。地兄はすこく計略の裏搔く矢先に返し矢も思案とりん。フシ案の馬場先。窺ひ寄つたる侍は古郡新左衛門。阿盛綱殿か。城内の首尾何と何と。イヤもう弟高綱が義心は鐵石。某も北條殿の御頼み。何卒高綱を鎌倉へ味

方させんと。よそながら心底を探り見れども。いかなく二君に仕へる所存のない事。しつかりと錠が下りました。とてもお手に入らぬ高綱。此上暫時も猶豫ならず。短兵急に取圍んで。城を落すが肝要。地早や明方も程近し大將へ御注進。肝要。地早や明方も程近し大將へ御注進。げに尤もいざごされとフシ逸足出して行く跡に。地高綱しづく動き出で。阿時政に頼まれて我を鎌倉の味方につけんと。あざとき兄が伴ひ表裏。計略を仕損じたれば時を移さず寄せ來らん。ヤアく陣所の諸軍ども鐵砲火矢の用意せよと。地撥押取つて陣太鼓。コハリ亂聲に打ち立つれば東の。山に茜さす白旗。赤旗関の聲早や寄せ來る。三度朝嵐。地待設けたる坂本勢。對櫓の矢間より。敵を寄せせと差詰め。引詰め射かくる矢先は雨霰。射疎められて寄手の軍兵。攻めあぐんでぞフシ見えたる所に。地城の大木戸押開き。

花やかなる若武者一騎。駒に鞭を打立て打立て。手綱揺繰り乗出し。阿ヤア臆したる鎌倉勢。我討取つて手柄にせよと。地鞍笠に突立上り。阿ノリ我こそ佐々木四郎左衛門高綱が嫡子小四郎高重。地今日が初陣と名乗りかけく。東西に驅廻れば。好き敵なり討止めんと。數多の軍兵ばらくくと。押取巻く。櫓より母篝火わが子の初陣勝負は如何と。フシ見れば平場の戦ひに。地多勢の中に取込められ。父に學びし手練の太刀打。前後左右より突懸くる。翠柱熊手十文字。切拂ひ眞甲綴割手を碎き。切立てられて軍兵ども立つ足もなく逃げ散れば。櫓より見る母親は。嬉しさフシ足も千鳥泣き。地ハルシ濱邊の方より年配恰好同じ毛の。駒に跨り乗出し。阿目覺しき小四郎殿の働き驚き入る。某はそなたの伯父。佐々木三郎兵衛盛綱が一子小三郎盛清。地互に初陣從兄弟同士の

晴勝負と。兩人馬を駆寄せ。く太刀抜きはなし。片手綱。互に覺えの大極無極の太刀捌き。手を盡してぞ戦へば。左手の山の尾先より。小三郎が父佐々木盛綱。悴が初陣勝負は如何にと。敵下す遠眼鏡。母は槍に目も放さず膽を冷する子と子の勝負。そこを付け込め小三郎と傍なる人にいふ如く。地父があせれば篝火は。それ小四郎打太刀が鈍つて見える。そこをくと力む父親あせる母。互に勝負もつかざれば。寄れ組まん尤もと馬を乗寄せむずと組み。えいやくと揉み合ひしが。鏝蹴放し組みながら兩馬が間にどうど落ち。上になり下になり。ころくフシ轉び打つたりしが。地小三郎運や強かりけん。小四郎を取つて引伏せ。上帯解いて高手小手。折重つて大音上げ。阿ノリ佐々木の小四郎高重を初陣の手始め生捕つたりと呼はれば。地寄手はどつと褒む

の聲。櫓の上に篝火がわつと泣く聲。勝鬨は谷に。響きて。三度騒しき

第八

本ッその源は近江路の比叡山。おろし隔てられ。ヌエ便り堅田の雁絶えて。フシ武士の。義は石山や月の弓張矢叫びの。矢橋の。歸帆陣幕も。ひらめく比良の陣館。小三郎が初陣の手柄始めと父の悦び。妻の早瀬老母の微妙。軍の安否聞く迄は。フシ心許さぬ持刀。地腰元どもも鉢巻しめ追々告げる高名噂。詞目出度い目出度い和子様が今日の手柄の一番帳。同じ初陣同じ年の小四郎を生捕り給ふは。地大の男を仕止めたより。遙かの譽とッシ口々側から。地早瀬が嬉しさ。詞申しお聞きなされたか。ほんそ孫の小三郎。これからは猶祖母様の甘やかしが思ひやら。さりながらひよんな事は。其手柄

の相手が他人なればよけれど。やつぱりお前の孫の小四郎。地嬉しいと悲しいと片身がはりのお心を。思遺つてといふを打消し。詞嫁女そりや祖母への當言か。

尤も孫の名はあれど。不所存な悴佐々木高綱。音信不通の中に出來た小四郎とやら。つひに顔見た事もなし。よしは不便に思へばとて。かう敵味方と別れた上。我も源藏義秀といふ弓取を夫に持ち。盛綱を生んだ母。地涙かけてよいものか。そんな事云出しても下さるな。詞シテ兵衛盛綱孫の小三郎まだ歸館召されぬか。ハイお二人ながらお具足をお上下に召更へられ。道より直に石山の御陣所へ御出仕遊ばしたとの注進。地定めてきつい御褒美と。フシさどめき渡る程もなく。地立歸る佐々木兵衛。小三郎盛清諸人の尊敬身の面目。上下衣服も花やかに自然と威を持つ其跡に。無慙やな小四郎は高手に締

むる縛いしめ繩なわ。雜兵雑兵に取巻とらまわかれ。羽交はねまひは

ぬしよげ鳥との地顔ぢがほ見始めの孫かとも。いふにいはれず面おもさしの。別れし我が子高綱たかねに。似たと思へば不便べんさを。嫁よめの手前てまへと紛まじりせど胸むねつばらしう姿形すがたがた。見まいと思へば目にかゝる。スエテ血筋ちぢんの。因果いんぐわぞせん方かたなき。兵衛盛綱べゑもり謹つつしんで。詞悴ことせ小三郎せうざう初陣はつじんの手始め。これなる繩なわ付生捕なわつけりし事誰たれ々々よりも目指めざす大敵たいてき。佐々木四郎左衛門ささきしうざゑもんが悴せ囚とらふとせしは味方あじかたの強味つよあじ。拔群はつぐんの高名たかなと時政ときまさ御感ごかん斜しやならず。地御ぢご悦よろこびの盃さかづきを下くだされ。手てづから感かん状じやうを下くだし給たまはる。詞御前ごまへに並居ならひる諸大名しよだいめい。凡たゞそ子こを持つ程ほどの人羨ねむまぬ者ものもなく。子息こじきの武勇ぶゆうに侍わかしる爲ため。そこへも盃さかづきこへも頂戴ちやうたいともてはやさるる親おやの面目めんもく。それ故退出こたひだも遅おそなほる。首尾しゆび残のこる方もなし。地ぢお悦よろこび下くだされと。語る中より早瀬はやせが浮うきく。詞何ことと御覽ごらんじましたか。可愛可愛さうに軍いの供たてしたがるものを。

足手纏あしづなひぢや留守くわしゆして居ゐれと叱なぐ付けて。

鎌倉かまくらに残のこしてお出でなされたれど。地今度ぢこんどの軍いに外はずれたら。生きては居ゐぬとせがみにせがまれせう事ことなしいつそ祖母そぼ様さま三人づれ。跡追あとづいうて来たきた時ときにも。詞さんくことさんくに叱なぐられたが。今日けふの手柄てがらを見た時は。よう連れて来たきたと私が自慢こゝろ。出でかじやつた。地生ぢなまんだ母ははまで俄たちに肩かたが聳あがりつて来たきた。和子わこ様さまお手柄てがらくくと賞あづかめそやしたる難がたしさ。微妙めいぶも共ともに出でかしたと。勇ゆうんで見みても。何所なんどころやらに濟すぬは胸むねの。潮境しほさかいわけ兼ねるこそ。フシ道理ぢりなれ。地小三郎手せうざうてをつかへ。詞わけて君きみの御説ごせつには囚とら人の小四郎せうしう。首討くびうちつ事こと必ず無用むいよう。何時いつ迄までも助け置おくこそ味方あじかたの計略けいりやく。地縛ぢづめめは其儘そのままにて。随分ずいぶん大切たいせつに仕つかれとの御事ごことなり。詞ナウ小四郎殿せうしうだんこなたとは従兄弟じゆんけい同士どうし。初陣はつじんの軍いに仕つか負け。嗚な無念むねんにごさらうと。地言ことはれて小四郎せうしう顔振かおを上げ。詞父とと様の豫あたまて

の教しよ。勝かちつも負まけるも軍いの習なひ。まさか

の時に逃にげるのが侍ざうりの恥辱ちじよくぢやげな。生捕なまられても恥はとは思おもはぬ。早はやや首切くびきりつて下くだされと。地目ぢめを隠かくいだる立派たてがたさは。フシ誠まことに父ちちが子こなりけり。地物見ぢぶつみの侍罷出ざうりだで。詞和田兵衛わだべゑ秀盛しゆせいと名乗なをり。盛綱もり公こうに見み參ま致ぞさんと。供廻きやくわいり僅わずかか一ひと人にて通り候こうと地訴ぢうふれば。詞ハテ心得こころえぬ。敵方てきかたの侍大將ざうしやう輕かろ々々しく來きるは一物いちぶつ。ソレ囚とら人に奥おくに取とり逃にげずな皆退みなひけと追立お立て遣やり。地騒ぢさわが寸座席すんざせき取片とり付け。フシ衣紋いもん繕つくひ出迎でむかふ。地甲冑かぶとの姿引替すがたひかへて長上ながじやう下踏しもふみみしだけ。伊達いだて拵ごしらえの大小おほいもさしも無骨むこつの荒あくれ男おとこ。目禮めらい式しき禮らい悠々ゆうゆうと。上座じやうざにフシどつかと押し直ただり。詞扱あ々々此度このたびの合戦がっせん。佐々木三浦ささきみづらかく申まをす和田兵衛わだべゑ。火水かみづの勝負しやうぶを決きせん。牙くはを嚙かんで相待あひまちつ所に。鎌倉かまくらの悠長ゆうぢやう武士ぶし。一日いちにち寄よせては二日ふたにち見合みあひせ。眠合ねあうて日ひを送おくる中なか。此方このかたはほつと退屈たいくつ。それ故

今日は具足も取置き太平の姿。坂本の城より使者に参つた。ハア／＼これは／＼名にし負ふ和田兵衛殿。よく／＼大切の儀なればこそ。お使者の趣逐一に仰聞けられと有りければ。イヤ別儀でござらぬ。

今朝高綱構へにて。其許の手へ生捕られし小四郎高重。ちと此方に入用なれば。只今お返し下されとの使なりと。フシ事も

無げに述べければ。調ハ、これは存じの外の御事。何ぞや一人の童づれに。侍大將の自身馬を向けられしは珍説々々。

あの小倅一人がなければ。合戦も得なされぬか。何故にさ程の懸望事をかしよう存ずると。地嘲笑へばげに尤も。調併し此方

に不審なるは。その童の小四郎を貴殿の子息が生捕りしを。一城をも乗取りしが

如く悦び勇み。鎌倉方の勝軍の基なりと。窺を敲き勝鬨作つて。引かれしはこれ如何に。さ程鎌倉方に懸望せらるゝ小四郎

故。此方にも惜しく存じ。是非所望に参つたり。その代りに少分ながらこの和田兵衛が鬚首進上申す。お望ならば手柄次第に。随分取つて御覽なされと。地むすすと坐したる。フシ不敵の顔色。地盛綱打笑

み。調扱々弟ながら高綱は。大功の勇士と思ひしに。倅に迷ふ未練の性根。そこを察して朋輩の誼み。命を救ふ情のお使者。

あれしきの小兒いか様共申したけれど。生捕の帳に記した上は。時政公より預りの囚人。盛綱私には渡されず。ならば踏

込奪取つて歸られよ。其座は一寸も立たせじと。反打つて詰めかくれば。ア、おせきなされな。貴殿と拙者只今こゝで刺違

へては。敵味方によき大將二人を失ひどころも兩損。よし／＼御邊の儘にならぬ囚人。此上は石山の陣に参り。時政殿に

直談して。自他とも所望致して歸らん。盛綱地さらばと立上り。フシ廣庭におり立

てば。調ヲ、そりや兎も角も勝手次第。さらば石山へ御案内申せん。ヤア／＼誰かあると詞の下。地小具足固めし覺えの力者。フシばら／＼と取巻いたり。調ハ

テ仰山な案内者。敵の陣中へ／＼と一人参る和田兵衛。不知案内の無骨者萬事宜しう。氣遣あるな。ソレ。必ず大將の御座近く。ナ。お引合せ申すならば。

大事の珍客。随分御酒を合點か。イヤ御酒とは忝い。我等別して大好物。御馳走ならば湖も漑乾してお目に懸けう。お着

の飛道具。槍薙刀の串着何本なりとも賞玩致す。盛綱殿おさらば。和田殿御苦勞。案内地大儀と長袴。虎を放して。やる勇

氣。火焰の中へ行く大膽。心の具足。鐵石のオケリ石山へさして出て行く。地盛綱は

只茫然と。スエテ軍慮を帷幕の打傾き。思案の扇からりと捨て。調母人それにおはするかと。地音なる聲に立出づる。陣屋

の隈々後前見廻し。母の膝にすり寄つて。

御親の役目を子が勤むるは順なれども。

御老體の母人に。御苦勞お頼み申さねば

叶はぬ事。申さぬ先から心得たとある。御

誓言承りたしと。地事ありげなる願ひの

品。聞かねど流石佐々木の後室打領き。

御親子の中に改めて頼むとあるはよくよ

くの事ならぬ。仔細は知らねど心得まし

た。ハッア早速の御承知忝し。お頼の仔細

と申すは。最前の囚人。拙者が爲には甥。

母人の爲には孫の小四郎を。今宵のうち

に母のお手に掛けられてと。地聞きもあ

へサコレ盛綱。御最前我が君よりの

仰渡され必す小四郎に過さすな。殺すな

との御詫ならずや。サアその殺すなと御

詫故に。猶以て殺さにやらぬ。辯舌を以

て人を憐くる北條殿。小四郎を殺すなと

の上意は。生け置いて人質とし。子を餌

に飼うて。佐々木四郎左衛門高綱を。味

方に付けけん謀鏡にかけて顯はれたり。

なか／＼心を變ずべき。弟高綱とは思は

ねども。地如何なる大丈夫も我が子の愛

には迷ふならひ。萬が一この謀に陥つて。

降参などの心付かば。子故に不忠の名を

流さん事残念至極。よしさはなくとも小

四郎が。俘虜となつて生きある中は。恩愛

といふ大敵に高綱が弓勢も弱り。刃金も

自然と鈍る道理。御迷の種のこの小四郎。

一時も早く殺してしまへば。弟が義心猶

猶鐵石。これぞ兄弟弓矢の情。地とあつて

我が手にかくる時は。主君北條の命に背

く。幼な心にこの理を辨へ。自身に切腹

するならば。我は油斷の過りばかり。

兄が義も立ち。弟が忠も立つ。雙方全き

この役目は。御苦勞ながら母人。密に小

四郎に腹切らせて下されかし。地現在の

甥が命申し宥めて助けるこそ。情ともい

ふべけれ。殺すを却つて情とは情なの武

士の有様や。如何なれば兄弟敵味方と引

分け。今朝の矢合に敵は甥なり。味方は

我が子。肉身と肉身の。劔を合はず血潮

の瀧。修羅の巷の攻太鼓胸に警石こたゆ

るつらさ。弓馬の家に生れし不祥聞分け

てたべ母人と事を。フシわけたる物語。

地母は手を打ち尤も／＼。兄のそなたも。

弟の高綱も我が子に依怙はなけれども。

隔てゝ居る程不便もまさり。御有り様は

そなたにも。心を置いて居ましたが。弟

に不忠の悪名を。付けさすまいと左程迄。

心遣ひの親切。地ヲ、忝いぞや。フシ嬉

しいぞや。御世の譬にも。小の蟲を殺し

て大功を立つる事。眞實親身は子よりも

可愛い孫なれども。思ひ切つて切腹させ

う。ヲ、お出かしなされた。健氣者とは

見ゆれども幼き小四郎。もし小腕に切損

はゞ。母人よろしう御介錯。地早や短日

の暮近し。佐々木兄弟が苗字を汚すか名

を上げるか。二つの境涙ばしかけ給ふな。

詞氣遣ひめさん後ればせぬ。地必ず氣強う遊ばせと。渡す一腰受取る腰の張弓にフシ詞番うて別れ入る。フシ峯吹き返す。木枯に。早や園城寺の鐘諸共。誘は

れ来る白羽の矢。紅葉の茂みに射込みしは。主を誰とも人目せく。オケリ陣笠。目

深に篝火が。男出立の半弓にやはかあだには歸らじと。フシ陣屋間近く慕ひ寄り。

地和田殿の供廻りに紛れ込み。爰迄は忍入つたれど用心堅き陣屋の木戸口。心を

通はず矢文の謎。小四郎が目にかゝれかし。祝ひ祝うた初陣に。忌まはしい細目

の恥。外の手でもある事か。詞従足弟同士の小三郎。憎でらしい手柄顔。甥を縛

らせ伯父の身で。それが本意か恨しい。地どうして居るぞ只一目。見たい逢ひた

い間の戸に。我が身を袴と立板も。フシ通すは涙の矢數なり。地洩れてや奥に聲

高く。詞侍中々々。夜廻り怠り申されな

と。地女の聲も敵の中。胸驚かれ篝火は。さし足ながら忍び行く。地障子さつと目

早の早潮。紅葉の矢文抜取つて。詞つくづく眺め扱こそ。羽響もなき忍びの

矢。女業と推量に違はぬ手跡。状の文體にもあらず。名にし負はゞ逢坂山のさね

かづら。人に知られでくる由もがな。と古歌を書きしは。ム、く。手は見知ら

ねど相嫁の篝火。囚はれの小四郎に。この陣屋を脱け出でて。人知らず来るよし

もがな。こゝは處も近江路や。地世に逢坂の關の戸を。明けて逢はんと知らせの

謎。詞エ、侍の母の様にもない。未練なさもしい。軍に立てば討死は覺悟のまへ

と。立派な小四郎に悪氣を付け。もし取逃しやなどしたら。其不調法は誰にかゝ

る。一家の誼は生捕つても。命に別條ない様子。知らせて安堵さす程に。必ずこゝ

らに狼狽へて。親子一所の繩目を受け。

夫の名まで汚しやんなど。地恨のうらの反古文。打返したる返事の古歌。矢立の硯

さらく書認めて括付け。内にも人目滋籐の弓打番ひ陣外の。小松にひやうど

手答とフシにも立て切る障子の内。地幼な心に油断せぬ。繩付ながら小四郎は。そ

つと二間を忍び出て。詞今伯母様の讀まして戻れとの。知らせは聞いても敵の中。

地見咎められては恥の恥。とは云へ母様何所にござる。死ぬともちよつと。顔見

たやとそろりくとぬき足も。フシ危き毒蛇の陣の口。地あはや跡より貌ふ微妙。

小四郎待ちやと聲に吃驚。ア、イ。何所へも行きや致しませぬ。御赦されてとばかりにて。わなくフシ慄ふ有様を。地

つくく見れば見るにつけ。同じ佐々木の血筋でも。奴も果報の拙い子や。囚人の

身となりたれば子心にも氣おくれして。見すばらしい顔容。今宵限りの命とは。云はねど蟲が知らずかと。思へばそぞろ先立つ涙。胸に押下げ撫下し。詞ヤレ孫よ此所へおぢや。コレそなたの祖母ぢやわいの。器量骨柄揃うた子に。痛々しいこの細目。解いてそなたにこの祖母が。云開かす事ありと。地立寄り解く血筋の細。子故に引かれ篝火が。又立戻る陣屋の前。詞矢文の返事は兄嫁の早瀬の手跡。行くも歸るも別れては。知るも知らぬも逢坂の。關とは時節を待てとの事か。地いかにと見やる戸の隙間。微妙は孫の手を引いて一間の障子押開き。詞ナウ小四郎。高綱に別れてから十三年の年月。孫ありとは聞いたばかり。懐しさ逢ひたさは。膝元で育つた小三郎より。顔見ぬ其方の不便さは百倍。地殊更永の浪人の貧しい中に育てられ。武器馬具もさぞ不自由に

口惜しう暮しつらんと。思遣る程片時も忘るゝ際はなけれど。詞思ふに任せぬ敵味方。この上下は祖母がそなたへ引出物。地著てたもやいのと。差出せば。地何心なく押戴き。取上げて不審顔。詞申し祖母様。この上下にはなぜ紋がござりませぬ。九寸五分が添へてあるは。高名手柄せよとある。首掻刀でもあるまい。こりや私に腹切れとの。死装束でござりますなと。地覺る利發に驚く篝火。微妙はがはと泣倒れヌエテ暫し。詞もなかりしが。詞ヲ、流石は親の子程あり。人に優れて其様に。聞分けよい程助けたさは。胸一杯に迫れども。殺さにやどうもならぬといふは。父親の高綱が。武勇智謀の優れたが。そなたの身の仇敵。助けよとある北條殿は。子を人質に高綱を。降参さする謀。それ迄は殺しもせず。まして助け歸しもせず。何時迄も陣中に。囚へて

置けとの主命。生きて居る程。高綱が武勇の妨げ。地爰の道理を聞分けて。潔う腹切つてたも。エ、見れば見る程目ながら鼻なら。眉に一つの鬘子まで父親にこの似やう。智慧才覚まで違はぬもの。老先も見ずむざむざと蕾の花を散らすかと。老の線言涙の。漏れて外面に聞く嫁の。何ぼ道理は道理でも餘り氣強いお袋様。我が子は殺さぬくと。仲上れども葦垣の隔つる。中ぞ是非もなき。地母の心の通じてや。小四郎おとなしく手をつかへ。詞私が命一つで。父様や伯父様の手柄になる事なら。何の惜みは致しませぬ。尤も腹の切り様も稽古して置いたれば。切損ひもせまいけれど。私が一つの願ひ。昨日軍の初陣に。直に敵へ生捕られ。地此儘死ぬるは弓矢神の冥加にも盡きたかと。何ぼう悲しい口惜しい。どうぞも一度お歸しなされ。父様母様にたつた一目逢

うた上。せめて雑兵の首一つ取つて。立派に死んで見せませう。このお願いを。同ア、これなう。賢い様でも流石は子供。預りの凶人敵へ歸して。盛綱が武士が立つものか。父や母に逢はされる程なれば。この憂目はないわいの。とはいふもの、逢ひたいは道理ぢやわいの。尤ぢや。世が世の時なら二人の孫。右と左に月花と並べて置いて老の樂しみ。この上もあるまいに。生捕るも孫。捕られるも孫。小三郎が手柄したと。煽立てる真中へ。縛られて引出されし。顔見た時の祖母が胸は。張裂く様に。フシありしぞや。同とても甲斐ないそなたの運。最期が未練にあつたなどと。口の端にかけられては。親高綱が弓矢の名折れ。尋常に死んでたも。ヤ、介錯はこの祖母。可愛い孫を先立てて。いつ迄因果の恥曝さうぞ。祖母も直に自害して。三途の川を手を引いて。地渡

るわいのと抱きしめ泣く。劍差付くれば。只二親に逢ふ迄は。赦して下され祖母様と。未練も親子の恩愛に道理といとど目もうろ。孫もうろ。隙あらば逃げんと見やる木戸口の。こゝにと母の呼子鳥。ヤア母様かと飛立つばかり。驅出す孫を引止めて。せき立つ老母の聲荒らから。同エ、未練者卑怯者。扱は母親と内通して。こゝを脱けて出る心ぢやな。それなれば猶助けられぬ。望の通り親にも一目逢はした上は。サア。切腹。但し祖母が手に掛けろか。サアそれは。サア。何とと威に抜いて振り上ぐる。劍の下に手を合せ。母様の聲聞いてから一ばい命が惜しなつた。どうぞ助けてお情ぢや。堪忍して下さりませ。アレい。と逃げ廻り。應れる孫に猶氣おくれ。同ヤレ最前の健氣な覺悟忘れしか。とても叶はぬ期になつて。臆病者の名を取るかや。伯

父が見ぬ先自害して。立派な最期と賞められてくれ。祖母が方から手を合す。頼むといへど迷惑ふ。外には酷や無情やと。恨も三方三惡道。前生の敵同士がいと可愛の孫や子に。生れて憂き目を見するかと老母が親身の血の涙時雨の中の枯れ紅葉。露より先に散りぬらん。地折からさつと山風の遙に陣鐘攻太鼓。事こそあれと早速の早潮。長刀掻込み走り出で。木戸口開けば駆入る篝火。同待つた待つた高綱のおかもじこりや何所へ。知れた事。我が子の小四郎取返す。ならぬならぬ。相嫁の初見參長刀に乘りたいか。地イヤ推參など。フシぎしあふ。地真中に三郎兵衛。小四郎小脇に引抱へ。同石山の御陣所に事ありと覺ゆるぞ。ヤアヤア小三郎は何所にある。ハア即ち只今御加勢と。地用意の小具足兜の緒。フシしむる間違しと駆け出す。地引違へて知ら

せの軍卒馳せ参じ。詞時政公の計略の如く。佐々木四郎左衛門高綱我が子を捕られし憤り。今宵自身に馬を出し手勢やうやう二千餘騎。鎌倉の總大將時政公に直見參仕らんと死物狂の其有様鬼神の如く見え候。併し味方は豫ての用意。大將の陣は數萬の警固。盛綱公には氣遣なく。俘虜の悴を守護あるべしとの御事なり。猶追々に御注進とッ申捨て、ぞ驅けり行く。地三郎兵衛大息つき。詞ハ、ア南無三寶しなしたり。さしもぬからぬ弟高綱。子故の間に心眩み。謀に陥つたるな。摩利支天なればとて。數萬騎のその中へ。一騎がけの死軍。討死せんこと眼前たり。此上は親の御慈悲。佛間で御回向なされかし。盛綱母人。地エ、力なき武運の末。残念さよと。ばかりにて、ッ眼を。閉ぢて奥に入る。地篝火なほも氣はそいろ。我が子も氣遣ひ夫も如何。千々に碎くる

軍の破れ。えい／＼おうと勝鬨は。敵か味方か二人の妻。胸の陣鐘足も空二度の注進勇みの大音。詞御悦び候へ軍は十分味方の勝利。大軍に取圍まれ集り勢の高綱方度を失うて逃走るを。或は掻首。或は射取り。残る兵散々に追捲り。諸葛孔明と呼ばれたる四郎左衛門高綱を。榎谷十郎が討止めて候と。地聞くより妻はハアはつと。心散亂燃えたつ篝火。夫の首は渡さじと。行くをやらじと止むる早瀬。詞大將軍時政公。御成さふと呼はる聲。地ハアはつと早瀬は大將のッ御座の設けと走り入る。地龍の雲に冲るが如く。一陽の春を待つ平の時政。近習の武士古郡新左衛門。佐々木小三郎盛清御供に属従して。御召換の鎧櫃御座の次に飾らせて。寛然と入り給へば。三郎兵衛母微妙敬ひ。請じ奉る。地竹の下の孫八慌しく罷出で。詞最前和田兵衛秀盛。

御陣所へ参りし所。日頃好める酒を強ひて酔ひ臥させ。居間の四方に金網をかけたれば。籠の鳥同然と思の外のしれ者。隠し火矢をもつて屋根を打抜き。御座の間の白旗を奪取り立退いて候と。地言上すれば時政公。詞ハ、ハ、ハ、敵の軍中へ鎧も著せず只一人。踏込む程の不敵者。汝等が手に合ふべきか。第一の大敵佐々木高綱を討取つたれば。腹心の害は拂うたり。さりながらこの佐々木。古への將門に習ひ。一人ならず二人三人の影武者あつて。いづれを是と見分け難し。地誠の佐々木か偽首か。弟が首よも見損すまじ。兄盛綱實檢せよと仰の下に新左衛門ッ首桶。御前に直し置く。地三郎兵衛承り。大將に一禮し無慙の弟が死首に。是非もなき對面やと。吞込む涙うしろより。父の死顔拜まんと窺ふ小四郎。盛綱が引開くる首桶の。二目とも見もわかず。詞父

様さぞ口惜しかる。わしも跡から追付くと。地氷の刃雪の肌。腹にぐつと突立つる。詞ヤレ母人お止めなされ。何故の切腹仔細を言へ。様子は如何にと人々慌て介抱に。小四郎きつと目を見開き。詞何故死ぬとは伯父様とも覺えぬ。卑怯未練も。父様に逢ひたさ。父を先だて何まだくくと生恥曝さん。親子一所に討死して。武士の自害の手法を見せると地きりきりくと引廻す。その手に縋り母微妙。ナウその立派な心を知らず。叱つた祖母が面目ない。休へたもと右左目をしはたたく三郎兵衛。猶豫は如何に早や實檢。何とくんと御上意に。疵口拭ひ耳際まで。熱と改め故實を守り。謹んで兩手に捧げ。詞矢疵に面體損じたれども。弟佐々木高綱が首。相違ごさ。地なく候と。スエテ御前に直し押し退れば。詞ホ、ウ骨肉の兄が實檢といひ。首に向つて小四郎が恩愛の涙。

切腹の有様。誠の首の證據明白。思へば昨日この首に後を見せし時政が。今手の下に誅罰する武運の強さ。ハ、ア心地よや嬉しやな。今といふ今時政が。始めて枕を安く寝るは盛綱が働き。我が著換の鎧一領。當座の褒美に渡し置く。小三郎其外には陣中にて。地勝軍の恩賞せん。皆萬歳を唱へよと。悦喜の装ひ四邊を拂ひ。オケリ本陣。マシとして歸陣あり。地盛綱あたりを熱と見廻し。詞佐々木高綱が妻篝火。計略の僞首仕畢せられれば。小四郎に最期の暇乞。赦すこれへと言を。地聞く間遲しと轉び出で。我が子に葬と抱き付き。スエわつと泣くより。外ぞなき。涙ながら母微妙。詞僞首と知つて。大將へ渡しした其方は。京方へ味方する心底か。イ、ヤいつかな心は變ぜねど。高綱夫婦が是程迄仕込んだ計略。父が爲に命を捨つる幼少の小四郎が。あんまり神妙健氣

さに。不忠と知つて大將を救きしは弟への志。彼が心を察するに。高綱生きてある中は。鎌倉方に油断せず。一旦討死せしと伴つて山奥にも姿を隠し不意を討たんとす謀。然れども底深き北條殿。一應の身代りには中々喰はぬ大將。そこを圖つて一子小四郎をうまくと此方へ。生捕らせしが手段の根組。地最前の首實檢。僞首を見て父上よと。誠しやかな愁歎の有様に。大地も見抜く時政の眼力を眩ませしは。教へも教へたり。覺えも覺えし親子が才智。見えすく僞首とは思へども。か程思込んだ小四郎に。何と大死がさせられう。主人を救く不調法。申譯は腹一つと。極めた覺悟も負うた子に教へられ淺瀬を渡る此佐々木。甥が忠義に比べては伯父が此腹。百千切つてもかけ合ひ難き最期の大功。其方が命は京鎌倉の運定め。打出かいたな。出かしたと手負の顔を。打

守り〜悲歎の涙にくれければ。篝火いとどまきかれて。子を褒められる親の身の。悦ぶは常なれど生きて高名手柄して。今の仰に預らば何ぼう嬉しかるべきに。年相應より利發なが生れ付いた此子が因果。いかに武士の習ひぢやとて。斯う斯うして自害せいと。教ゆる親の胸欲さ可愛や初陣の初から。死に行く事合點して。同俺や侍の子ぢやによつて。討死するは嬉しけれど。死んだら父様や母様に。つい逢ふ事がるなまいかと。そればつかりがと云ひさして。泣顔見せず勇んで行きしその立派さ。連れ弓矢打物迄誰に劣らぬ物覚え。腹切る事まで是程に。器用になくば何事ぞ。コレなう小四郎。小四郎と手負の耳に口さし寄せ。同この深手ぢやも。耳も還なる。目も見えまい。今伯父様の仰つた事聞取りやつたか。そなたの命捨てたので。高綱殿の忠義が立つと。褒

美のお詞。地それを未來の引導に迷はずと佛になつてたもと。云聞すれば嬉しけに。同そんならわしが死ぬるので。父様の軍の勝になるか。エ、忝い。祖母様は何所にぞ。わしや縛られても。卑怯者ぢやないぞえ。それで死んでも本望ぢや。伯父様伯母様。祖母様に母様にも。逢うて死ぬるは嬉しいが。たつた一つ悲しいは。父様に地〜と跡は得いはず舌硬ばり。次第々々に弱り果て惜しや實生の初花も。無常の風にッ散りてゆく。地コレなう小四郎孫やい。今はの際に父親を尋ねて死んだ子の心。思遺つて只一目なせ顔見せに來てくれぬ。千騎萬騎の大將にも成るべきものを梅檀の。二葉で枯らせし胸欲は神も佛もなき世かと。歎く微妙の聲限り涙の早瀬篝火も。消ゆる。ばかりの思なり。地三郎兵衛泣目を拂ひ。同ハア歎に紛れ後れたり。實檢を仕損じたる鎌倉への申

譯。地母人さらばと差添に手をかくれば。同ヤア〜盛綱。和民兵衛秀盛これに在り。敵を見掛けて自害とは。臆したるかと思ふ。聲かけられ。シャ幸ひのよき敵。歸らば其儘歸さんに。運盡きたる秀盛。地迷しはせじと突立てば。同ヲ、和民兵衛が習ひ得し南蠻流の懐鐵砲。地受けて見よとどろど打つ狙は外れて鐵櫃。内に忍びし標。谷十郎太腹射抜かれ。ッのた打つたり。同見よや盛綱。底の底まで疑ひ深き北條の隠目附。汝が手にかけざれば。不忠にあらず彼めが不運。今又御邊自害せば。鎌倉への義は立つべきが。佐々木が首は偽物なりと。忽ち露顯し是迄も。碎きし心は水の泡。時を待つて佐々木高綱。誠はこゝにと切つて出づる其時に。潔く切腹せば。忠も立ち義も全し。腹の切り様早い〜。地ハ、アげに過つたり我が命。暫く生きるは弟〜これも情の一つには。甥

への寸志追善供養。野送り萬事も一家の内證。諸事何事も此座きり。表は京方。鎌倉方。地右大臣實朝の御座の白旗奪取りしは。軍の吉左右重ねて再會。フシとめて見ぬかと出でて行く。阿ヤア盛綱が陣中にて。味方の武士を討つたる曲者。返せ。地戻せは弓矢の儀式。フシ因は兄嫁小姑孫よ甥子の亡骸に。うき事三井の暮の鐘。消え行く子より親心。我からさきの夜の雨父には一目。フシ粟津の嵐。木の葉の紅葉かき寄せて。夕を照らす瀬田の橋門火は。城煙敵味方さらばと。ばかりユリ三軍へ別れゆく。

第九

無比良の暮雪と賞せしも。ナオスフシ誠は寒き暮れの雪。冬ぞ寂しき大津の浦に。オマリ世を漕ぎわたる船長の妻もとん／＼外稼。内は十五の漣くり。留守の手習机の上。草紙に六道の切書いて。雨天かまい

かの玉錢を。一人打つたり。地飛廻り。フシ遊びにたわいなかりけり。フシ其日も西へ。入相の。鐘に散りしく花ならで。雪。げをしのご相合傘。ホフシよその宿に身を寄せて。地我が家に歸る女房およつ。阿阿房よ戻つたぞよと。地いふ聲聞いて玉錢隠し。阿ヲ、お家様ようごんたの。ヲヲ彼奴わい何ぞ他所から來た者の様に。そして暗いのに灯もともさずぐぐぐと何してゐる。サア其様にぐぐぐすると叱られるによつて。ぐぐぐするかせんか暗がりにしてお前の臍探ろと思つて。又阿房めが灯をともせと。地いふに合點角行燈。硫黄の花にハ、噓。阿又人を誘らんすかいのと。地いひ／＼戸口差覗き。阿アレ門口に誰やら居る。誰ぢや何所の人ぢや。イヤあなたは傘を御無心申したお侍様。地お蔭で雪げを凌ぎまして忝う存じます。マア／＼お入りなされませと。

いふに侍内に入り。これがこなたのお宿元か。扱々綺麗なお住居でござりますな。イヤモやう／＼頃日此家へ参りし故まだ取縮りもござりませぬ。シテ御亭主の御商賣は。イヤ亭主と申すは私ばかり。地營みとても僅かな暮し。阿ム、すりや後家御か。ハイ左様でござります。是は／＼まだお若いに嚙御不自由にござらうな。イエ／＼獨身に慣れましてはさして不自由はござりませぬ。此浦風の烈しさに。又しても夜牙が致し。心細い折しもは。誰ぞ力になつてほしいと。サア思ふ様な縁もないものでござりますと。地何所やら甘い咄に侍襟かき合せ差寄つて。阿我等花園園部之介と申す浪人。未だ定まる妻もなければ。清水の花盛にはこの園部を戀慕ふ短冊もあらうかと。櫻の枝を見廻つても。當世は歌詠む姫も無いかし。雨淋しう暮す某。何と相談する。地氣

はないかと。しなだれ、うさかれば。こなたも打笑み。聞きますればあなたのお名は園部様とやら。薄雲空の相合傘。お情深いも御縁の端。そしてどうやら愛しらしいお姿といひお顔付。女をなづます目元のしほと。地こぼれかゝりし委振に。現ぬかして。コハリ氣は上づり。側に阿房が差覗き。阿エ、悪い身をする侍。丁度股ぐらへ山猫挟んだ様に。コリヤ又阿房口叩かずと。爰に用はない奥へ行け。アノ俺に奥へ行けかへ。行けなら行こが。俺が奥へいたら挟んだ山猫を出しをろぞへ。まだ徒口をと地叱られて。盆太は奥へ立つて行く。およつは門の戸、差寄せて。地押入開けて。こてく取出す蒲團、打ひろげ。阿ヲ、寒む。こんな寒い晩はちつとなと早う寝て。地肌温めうと身を横に。なるたけ堪へる侍が。青うなり赤うなり。つく息さへも絶えなくに。阿も

う其所へはひろかへ。コレもう寝てかいな。どうもならぬと、蒲團の内。入ればおよつが起直り。阿そんならお前愈、私と寝る心か。イヤモ心は何所やら飛んで仕舞うて。身中が張切れる。そりや眞實でござんすか。ヲ、眞實とも眞實とも。もう根問ひせずとちやつと寝たい。イヤそれが定ならお前へわけて無心がある何と聞いて下さんすか。聞きたくても上氣して耳が聞えぬ。少々事ならまあ寢所での事にせう。イエく頼むことも頼んでから。何を隠さう私は敵討でござります。よし敵討吞込んだ。それぢやによつて若し敵に出合はば助太刀して貰はにやならぬ。それ合點でござりますか。よし助太刀吞込んだ。萬一反討にあふ時は。命を捨て下さんせにやならぬぞえ。よし返討吞込んだ。ヲ、何をいうても吞込んだと。大腹中なお人では

あるわいの。よし大腹中吞込んだ。ヲ、そりやお前何をいふのぢや。何ぢや知らぬが早う寝たい。マアよしれぬ事を云はずとも。私が敵といふは兵法の達人。助太刀せうと仰るお前。手の内が見たうござんす。ヤア鉢坊主ぢやなし何の手の内。サア兵法の御鍛錬が。ア、兵法使ふのか。そりや心安い何時なと使うて見せう。左様なら御手練の程を。ヤレく嬉しやと申してから。心掛けねば竹刀しなへの用意もなし。何を以て御手練を。イヤ氣遣ひ召さんな。竹刀しなへ用意致した。何竹刀を御用意とは。ヲ、サ心掛の武士だもの。竹刀がなくて何とせう。しかも長いと短がある。地兩腰するりと拔放せば。赤斷でもない備前竹光。阿何と天晴竹刀であらうがの。アノ是がお前の魂か。イヤ魂は飛んでうてこりや人をだましひぢや。ヲ、いつそ呆れて物がいはれぬ。

もう御手練見るに及ばぬ。そのお心なら寝て語る。何ちや寝ようこりや忝いと。

地いふ間に行燈、フシ吹消せば。阿コリヤなぞ灯を消した。エ、明くては恥かしいなど。地勝手知らねば、此所彼所尋ね探る

其中に。阿房をそつと蒲團の内およつは。フシ勝手へ探り行く。地こなたは知らず高

這ひに。探り當てたる蒲團の内。何かはなしに、さぐさぐ。地入れば阿房が大

聲あげ。阿ア、イタ、ヤレ盗人め出あへくと。呼はる聲に吃驚し。こけつ

轉びつ侍は何所ともなく、フシ逃げ歸る。地跡に盆太が高笑ひ。阿ハ、逃げるわ

らうとかいつても。滅多に切れる盆太ぢやないわい。お家様も亦お家様ぢや。何のあんな奴が心を試す事があるもので。此間から来る奴等に。嫌な奴は一人もない。エ、障費な。追付け旦那様が戻つてであ

らう。湯なとたいて腰湯さそと。地あたりこて、取片付け。オトリ納戸へ入る

やいるさの月。地影さへ暗くしめくと。空にちらつく雪よりも、フシカ、リ齡の雪を蔽うたる。簀笠著たる老人を。乗せて我

が家へ戻り舟。櫓を押切つて陸に漕付け。阿急ぎ候程に。早や舟が著きて候。即ちこ

れが我等が内。サア、お上りなされませと。地歩渡せば老人は。しづく上る陸

の方。船頭も紡綱、亂杖に括付け。いざ御案内とフシ先に立ち。阿女房ども戻つたぞ

よ。お客がある何所に居ると。地夫の聲に女房が。疾しや遅しと。納戸を出で。

阿ア、二郎作殿戻らしやんしたか。今日は定めし寒かつたでござんせう。イヤモ寒い段ぢやない。雪はちらつく。向ふ風の比敷威で。船束持つ手も切る様にあつたれど。風に逆うて船押したので。おれは寒いを忘れたが。あなたには喉お冷え

なされう。地いざ先づあれへと勧められ。簀笠脱ぎ捨て、フシ上座に直り。阿一樹の

蔭一河の流れ。不思議に亭主が世話となり。寒夜の一宿過分の至りと。聞いて女房が呆れ顔。阿テモまあ仔細らしい物の

云ひ様。そして見りや生きた兜人形見る様なお方。ありやア何方でござんすぞ。イヤどなたやら俺も知らぬが。今日は草

津の方に軍があると聞いた故。何でもそこら邊へ行たら。よい儲があらうかと。矢橋の濱に舟着けて見合して居る所へ。

彼方がひよつこりお出でなされ。何がなしに舟へ飛乗り。ヤレ出せ。ソレ漕げと滅

多無性におだてられ。合點が行かねどもア沖へ漕出して。扱様子はと尋ねたれば。石山の陣所へ歸る者。それ迄急ぎ舟を著

けよ。望み次第舟賃やらうと仰有る故。畏つたと精出して。押ししても。漕いでも向ふ風。一向石山へ舟は寄らず。せう事

なしに爰まで連れまして戻つた。今夜は
こちらにお泊め申し。風が凩いだから石山へ
お供する。随分御馳走申してくれと。地夫
が詞にそれはマア、御難儀や。見まし
た所鑑とやらを召してござれば。定めて
軍に行くお方。何ナ申し。左様な事でご
ざりますかと。地尋ねに老人打頷き。詞ホ
ウ推量の通り。今日の軍に思はぬ敗北。
それ故かゝる世話に預る。コレこちらの入。
敗北とは何の事ぢやえ。ハテ軍に負ける
を敗北といふわいのやい。ム、そんならあ
なたはお負けなされたのか。フ、それは
まあ、お笑止や。そして見ました所が。
お年に不足もなさうな。命がけの軍
せうより。お子様もあらうに。隠居して
ござれば。敗北とやらもあるまいに。定
めてお腹が立つてござりませうな。何の
何の勝負は時の運による。一旦の勝より
始終の勝こそ善なるべし。計らざる今日

の戦ひ。佐々木の四郎が謀に乗せられ。
味方の大軍大半討たれ。某とても無念の
敗北。地陸路は佐々木に立て切られ。石山
へも歸り得ずとやせん方も落の方。途方
に暮れて漂ふ所に。何幸ひなる渡舟危き
難を遁れしも。全く其方が情故と。地始終
を話す軍の様子。聞いて女房が差寄つて。
何申しその佐々木とやら云ふ人は。討死
と聞きましたが。矢張生きて居られます
か。されば、これ迄佐々木を討取りし
も度々なれど。皆影武者の偽佐々木六日
以前の戦ひに。佐々木が悴小四郎といふ
者を。味方へ生捕る其砌に討死せし佐々
木が首。悴小四郎に實檢さすれば。誠の
親と歎き悲しみ直さま切腹。扱こそ佐々
木は討取りしと。安堵の思に今日の出陣。
又も佐々木に追立てられしは。幾人あり
とも計りなき。佐々木が謀の恐ろしやと
地フ舌を。巻いて物語り。地聞く女房が打

萎れ。今のお話聞くにつけ侍といふ者は。
小さい子でも軍して。命を捨てるといふ
事は。果敢ないといはうか。いちらしいと
いはうか。その親々の身に取つてはとい
ふを打消し。何エ、何のかけも構はぬ他
所の事を。イヤ申し。かうお宿申します
からは。とても事のあなたのお名を。
地ホ、我こそはといはんとせしが詞を控
へ。詞イヤ端武者なれば鳴濤がましうム
ム。成程。薄の穂にも怖ぢるとやら。承つ
て益ない事。定めてお疲れてござりませ
う。見苦しけれど奥へござつて。御休息な
されませんか。如何様。老體なれば餘
程の疲れ。詞に付いて暫く休息。イヤモ
何にもお氣遣な事はござりませぬ。緩つ
とお休みなされませ。ホ、何かにつけて
心遣ひ過分。地過分々々と老人は。フッ
しづ／＼立つて奥に入る。地跡に女房が
くし／＼と、フッ思ひ詫びたる憂き涙。地

夫も思案あり顔に。手を^こ扱いて差俯向き。互に詞納戸より。ひよか／＼出づる阿房の盆太。重箱片手に。阿コレお家様。お前忘れてござんすか。今日はぼん様の一七日の速夜。それで一文餅三つ買うて来た程に祝うて佛様へ進せと。地いふに思はずせき上げてわつとばかりに。ステテ伏沈む。阿ヲ、しをらしいよう気が付いた。愚な汝が志^ち供^たへいでなんとせうと地しをしを。立つて押入の。フシ襖あくれば釣佛壇。御燈明の灯はありながら。漏る香爐の。香もりかへ。阿知覺院幼玄童子。佛果の爲と。地手を合せ伏し拜む目も。フシ涙なり。阿申し佐々木殿。シイ。イヤ二郎作殿。お前もこちら向いて。せめて一遍の回向として下さんせ。地私が干遍唱へるより。お前のたつた一遍が。あの子の功德になるわいのと。ステ又伏沈めば。阿ヤイ／＼たわけ者。奥に客人もこ

ざるに。見苦しい其泣聲。地エ、未練な奴と叱られて。阿イエ／＼なんぼ叱らしやんしても。これが泣かずに居られうか。地いかに男のかうけちやとて。お前ばかりの子かいな。私が爲にも子ぢやわいな。阿まだ年はもいかぬもの。かう。／＼せいと惨たらしい。父御の詞を子心に。大事大事も忘れもせず。立派にあつた其時の。委が今に目先に見え。何とこれが忘れられ。わしや忘れぬ。地得忘れぬとどうど伏し歎けば流石恩愛の。涙は胸につゝかけながら。阿ヤイ聲が高い静に泣け。我とても肉縁の悴。不便になうて何とせう。側^たであり／＼見た其方より。見ずに案じる我が心。どの様にあらうと思ふ。地骨は碎かれ身は刻まれ。肝のたげねへ焼金を。刺される様にあつたわいと涙隠せば。阿房は目をすり。阿ア、利根な坊様で。先度もナ。俺が穴^{あな}／＼してゐたれば。コリヤ

阿房よ。穴一すると手が下るといはしやつたによつて。コレ／＼そんなませた事いふと。つい死ぬるぞやと云うたれば。俺や侍の子ぢやによつて。死ぬる事は何ともないが。ひよつと死んだら。嗚か、涙が泣かしやるなアと云はしやつた。ついで泣かしやる様になつてのけたと。地大聲あけておい／＼泣き。阿コリヤもういうてくれな。聞く程苦しい此胸が。地裂ける様なと伏沈む。涙は琵琶の湖に。フシ流^{なが}る。寄する如くなり。フシかゝる。歎きの時しもあれ長押に掛けたる鳴子の音。風かあらぬかへぐわら／＼。二郎作聞くより突立上り。阿コリヤ／＼女房。城内より知らせの早打。ソレ奥の間に氣をつけよ。地阿房は裏をと追立てやり。戸口をちやうど差固め。居間の疊を跳ね上ぐれば。下よりぬつと鎧武者。阿ノリ今日味方の勝軍官上せんと手をつけば。阿

ヤア音高し〜。谷村小藤治。シテ城内に變はなきや。今日の一戦。味方の勝利。次第聞かんも、地ひそ〜聲。阿ノリさん候味方の軍勢栗津の汀に屯を構へ。戦ひを催す所に。敵の大軍どつと押寄せ。無二無三に駆け立つる。味方はわざと負色見せ。十町ばかり引退く。勝に乗つて追來る大軍潮の涌くに異ならず。味方もこゝに踏止り火花を散して攻め戦ふ。地仰置かれし時分はこゝぞと。四つ目結の旗さつと靡かせ。敵の後に大音上げ。阿佐々木の四郎高綱これにありと名乗りかけ〜。霧に駆け立つれば、地そりやこそ佐々木が又出たぞ。謀に乗らぬ内引けや。〜とわれ一に。狼狽へ騒げば後陣より。大將時政采配振立て。阿ノリ佐々木とて鬼神にてはよもあらし。騒ぐな者ども備へて立てて戦へと高らかに呼はれども。地佐佐木といふ名に聞怖し。崩れたつたる敵

なれば。耳にも更に聞入れず。風に散り行く木葉武士。逃げ行く者に目はかけず。目指すは時政只一人。阿ノリ餘すな漏らすな者どもと稻麻竹葦と取巻しが。天を翔つて通れしか又地を潜つて走りしか。無念ながら時政は討漏らし候と息つぎあへず。ッシ訴ふれば。阿ホ、通れ高名。手柄テ時政が出立は。ノリ鎧は緋緘錦の直垂。なに緋緘に。直垂とや。シテ〜。徒立か但しは騎馬か。イヤ馬は其場に射すくめられ。乗換もなく身は徒立。阿ム、さこそ〜。汝は直に城内に立歸り。勝軍の油断を窺ひ。夜討をかけまいものでもなし。萬事油断なき様に。變あらば早速知らせよ。早や行け。地行けと云渡し。差寄つて。ッレ耳に口。阿ハア、畏まり候と引返して拔道へ。地飛込むあとの古壘。

み立ち。阿今の注進聞くにつけ。割符を合す奥の老人時政に極まつた。此家へ來るは天の與へ百萬騎よりたつた一人を討取れば。地四海浪風靜まる手柄。用意さしやんせ四郎殿と急立つ女房。地騒がぬ高綱。阿ホ、圖らず我が手に陥る時政。とても今宵は過さぬ命。いや〜。落付くも時による。油断大敵小敵とて。侮らずとは常々お前が教へる軍法。いざ討ち給へ早う〜と地急き立つ折もあれ。又も知らせの鳴子の音。四郎心得手取早く。壘をちやうど跳ねのくれば。すつと出でたる四の宮六郎。阿御注進と呼はるにぞ。ノリヤ汝が五音は甚だ不吉。心許なし如何に〜。阿されば候城内には今日の勝軍。いづれも酒宴の興を催す。中に取分け和田兵衛殿。例の大酒數杯を傾け。餘程酒興の折柄に。大江の入道鏡子盃携へ出で。和田兵衛の軍功大將感じ

思召し。御悅びの御酒を下さる。頂戴あつて然るべしと聞くより何の思慮もなく。土器取つて押戴き。ちやうど受けて乾し給へば。忽ち顔色土の如く。穴より迸る血汐は瀧の如くにて。さしも強氣の和田兵衛殿。虚空を掴みて七頭八倒其儘息絶え候と。地語るにはつと佐々木が仰天。

三浦。ノッさん候取分け無慚は三浦殿。毒酒を以て和田を殺せし。暴悪無道の大江の入道。掴み拉いでくれんと。阿修羅王の荒れたる如く。入道目がけ驅上る。板間にかねて陥罪踏みはづして眞逆様。下に植ゑたる剣に裂かれ。身はずたくと三浦の最期。皆入道が謀計なれば。此上は頼家公御身の上も危し。地片時

も早く城内へ。御入りあつて守護あるべしと云捨て又も引返せば。始終こなたに立聞く時政。佐々木はとかう果果て

暫し。詞もなかりしが。ハア、天なるかな命なるかな。和田といひ。三浦といひ。いづれも秀づる當時の英雄。入道などが術に乗りしは。よく味方の運の盡。此上は片時も早く。城内へ馳せ向はん。篝火。用意。地用意と氣を急折から。俄に表騒がしく馬の嘶き數多の人音。

三鱗の旗指物。弓鍔持筒引馬の飾りも。きらつく鎧武者。門口に謹んで。鎌倉の大將時政公。此家に遁れまします由。忍びの物見が知らせにより。御迎の爲參上す。早く御歸陣然るべしと。呼はり皆々平伏す。城内に女房が猶急立ち。アレ時政を迎の大勢。この場を助け歸しては。龍を淵へ放すも同然。サア今の内本望々々。サアとあせる中。地時政公一間を立出で。誠に危き難を遁れ。殊に今宵の一宿迄。淺からぬ亭主が情。町人なれば褒美には。この濱

邊に家屋敷を建て與ゆる間。濱屋敷として永く所持せよ。猶も望の事あらば。重ねての沙汰に及ばん。さらばと馬引寄せ。ゆらりと乗れば諸車勢。フシカリ四方を圍うて立歸る。天の助は人力の。フシ及ばぬ運ぞ類なき。エ、手に入る敵をやみくと。遁し歸すは何事ぞ。未練とも卑怯とも言ふに言はれぬ腰拔武士。お前は天魔が魅入れしか。情なや淺ましやと。地耻しむれば莞爾と笑ひ。敵の謀

が。謀か計略か。ホ、今歸つたは時政でない。ありや偽者。ナニあの時政を偽者とは。ホこれ迄度々の戦に。此高綱に欺かれ。其無念やむ事を得ず。面體恰好似たるを選び。時政に扮装たせ。今日の軍に討死させ。時政こそ討取つたりと味方の者に油断させ。其虚を討たんといふ術と

に。手に入る敵をやみくと。遁し歸すは何事ぞ。未練とも卑怯とも言ふに言はれぬ腰拔武士。お前は天魔が魅入れしか。情なや淺ましやと。地耻しむれば莞爾と笑ひ。敵の謀

が。謀か計略か。ホ、今歸つたは時政でない。ありや偽者。ナニあの時政を偽者とは。ホこれ迄度々の戦に。此高綱に欺かれ。其無念やむ事を得ず。面體恰好似たるを選び。時政に扮装たせ。今日の軍に討死させ。時政こそ討取つたりと味方の者に油断させ。其虚を討たんといふ術と

に。手に入る敵をやみくと。遁し歸すは何事ぞ。未練とも卑怯とも言ふに言はれぬ腰拔武士。お前は天魔が魅入れしか。情なや淺ましやと。地耻しむれば莞爾と笑ひ。敵の謀

に。手に入る敵をやみくと。遁し歸すは何事ぞ。未練とも卑怯とも言ふに言はれぬ腰拔武士。お前は天魔が魅入れしか。情なや淺ましやと。地耻しむれば莞爾と笑ひ。敵の謀

が。謀か計略か。ホ、今歸つたは時政でない。ありや偽者。ナニあの時政を偽者とは。ホこれ迄度々の戦に。此高綱に欺かれ。其無念やむ事を得ず。面體恰好似たるを選び。時政に扮装たせ。今日の軍に討死させ。時政こそ討取つたりと味方の者に油断させ。其虚を討たんといふ術と

に。手に入る敵をやみくと。遁し歸すは何事ぞ。未練とも卑怯とも言ふに言はれぬ腰拔武士。お前は天魔が魅入れしか。情なや淺ましやと。地耻しむれば莞爾と笑ひ。敵の謀

が。謀か計略か。ホ、今歸つたは時政でない。ありや偽者。ナニあの時政を偽者とは。ホこれ迄度々の戦に。此高綱に欺かれ。其無念やむ事を得ず。面體恰好似たるを選び。時政に扮装たせ。今日の軍に討死させ。時政こそ討取つたりと味方の者に油断させ。其虚を討たんといふ術と

に。手に入る敵をやみくと。遁し歸すは何事ぞ。未練とも卑怯とも言ふに言はれぬ腰拔武士。お前は天魔が魅入れしか。情なや淺ましやと。地耻しむれば莞爾と笑ひ。敵の謀

疾くより計り知つたるゆゑ。攻口を弛めさせ。わざと助けて此家へ伴ひ。城内の變。一々聞かせて歸せしは。誠の時政を城内へ誘き出さん我が智謀と。地語るにさてはと女房が。始めて悟る夫の心。感じ入つて横手を打ち。詞通れ我が夫稀代の計略。そんなら和田殿三浦殿も。シイ。謀は密なるをよしと。地いふ間に取出す種が鳥。狙は松が枝ばつたり人音。詞申し今のは。敵より入る忍びの曲者。早や明方も近づけば。我はこれより城内へと又も疊を。地明鳥かはい。かはいの聲につれ。思出したる小四郎が名は消えもせて其主は。親を残して西方淨土。三彌陀の御國の。道法は計り知られぬ佐々木が拔道。抜目なき智謀の程こそ。三鷹たぐひなき。榮太夫江州坂本の城と申すは。後に戦々たる比叡を負ひ。前には湖水漫々として。日本無雙の名城に。立籠る源の

頼家公。數度の軍に戦ひ勝てども目に餘る敵の大軍。味方は小勢矢も盡きて。三早や落城と見えにけり。差太夫城内には大江の入道御母君を始とし。女中残らず居竝んで頼家公の御居間と。隔つる座敷は大廣間。今日を最後の門出と。オクリお湯引き。髪に梳り。留木の伽羅に諸軍勢。三心ときめくばかりなり。地入道母君に打向ひ。詞天命とは申しながら和田佐々木三浦之助。おのれが片意地を言募り此入道が下知を用ひず。その罰で残らず討死。所詮聞くべき運ならねば。御生害を勧めまゐらせ。某とても跡より御供。時刻移らば敵軍爰に亂れ入らん。敵に首を渡さんより。地片時も早く御生害と。頻つて勸むる入道が底意の。三程ぞ恐ろしき。榮宇治の方打領き。詞和田佐々木三浦の輩。討死せしとある上は。最早叶はぬ味方の運命。なに惜しからぬ自ら

が命さりながら。己々が身の始末疎になし置かば。これ亦死後の物笑ひ。ヤア皆の者。心残りのない様にめいめい心付合うて。自らが自害も見届け其上は心次第。必ず逸まる事なかれと。地女ながらも上に立つ。三心は。三根太夫遙か。奥より頼家公のお使として局の千草。三君よりのお使。搬運は申上ぐるに及ばず。味方の面々討死の上は。生害の時節今日。潔う死出三途の御供せん。母上様にもお心靜かに御用意あそばせ。此期に臨んで申すべき事としては彌陀の六字より他事なく候。其旨御肝要に思召し下されよ。地の御事にて候と涙。三隠して述べければ。榮此方からも使を以て申上げんと思ひし折しも。局大儀ぢや。シテ我が君にはお覺悟ようお入り遊ばすか。三根ハア、左様でござります。未明より御覺悟よく

只母上様の御菩提と。御經讀誦遊ばして
でござります。榮ナニ自らが佛果の爲。

ハア、三郎と答ふも。榮尋ぬるも跡は
フシ涙の玉。御前へ歸つて申さうは。

御念もじのお使かくなる上は互に申す言
の葉はなく候へども。今生の名残に御願
ばせ。今一目見まほしく候へど。入道の
計らひ故それも叶はず。冥途の旅へ赴き
候。必ず母にお心をかけられず。大將たる
御身に候へば。潔よく御生害をくれぐ
頼み参らすと地いふ聲涙に咽せ給へば。

榮夫三郎天付添ふ女中も一同に。お道理
様やと伏沈む涙。フシ限りはなかりけり。

貴爵ヤア森しい女ばら。局も早く立歸り頼
家公に早く切腹なされといへ。疾く
行くと迫立てられ。三郎地是非なくも
フシ立つて行く。産地あとに入道聲荒らげ。
泣いても悔んでももう叶はぬ。さつぱり
と諦めて。どれからなりと先陣お仕やれ。

この入道が始めたけれど。年役なれば
跡から罷る。女ばらは誰彼なしに立並ん
で。一所に死ね。サア宇治の方。地時移
ると三方取つて差付けく。サアくく
とせり立つるは。此世からなる呵責の鬼。

外面は修羅の攻太鼓矢叫びの聲。噴
く。榮母君耳を教て給ひ。ハテ訝しや。

昨日の軍に和田三浦を始め。佐々木の四
郎も討死せし故。最早この城保ち難し。

生害せよと入道の勧め。誠と思ひ極めし
に。今城外に和田佐々木とほの聞えしは。

誰ぞ遠見して参られといらつて宜ふ詞を
打消し。ヤア和田佐々木三浦を始め其外
頼む味方の大將。残らず討死したは違は

ぬ。死ぬるのが悲しさに血迷うた空耳な
らん。こま言いはすと早々生害。榮イヤ此
實否を質さぬ内は滅多に自害なるまいわ
いのまならずば某介錯と地すらりと抜い
て切付くる。榮どつこいさうはと三方に。

受けてもか弱き女業。産強氣の入道疊み
かけ既に。フシ危き其所へ。地後の襖蹴
放して佐々木の高綱飛んで出で。入道を
取つて投退け。某始め和田三浦討死と
伴り。御二方に生害勧めを手柄に時

政に。味方せんとは太い巧み。是迄味方の
謀内通したるも皆儂。主を賣るの極悪

人。最早通れぬ覺悟せよと地詰めかけら
れてちつとも動ぜず。阿ホ、よい推量。儂

等が忠義立が胸懸さに。頼家親子が首取
つて時政公へ降参せんと。心を碎いた我
が術。十が九つ仕畢せしに。見顯はされ

て残念々々。もう此上は死物狂ひと。地
佐々木を目がけ切付ける。地さしつたり

と撒潑り。刀をちやうど踏落せば。産詞に
は似ぬ大江の入道。奥をさして逃行くを。
地通さじ遣らじと。フシ追うて行く。榮地
跡に母君御聲高く。阿ヤアく者共。か
かる事とも知り給はぬ頼家公。御身の上

氣遣はし。此通り注進申せ。急げ／＼に
三浦地女申達皆々、フシ奥へ走り行く。三浦地
如何忍び入つたりけん。北條時政廣間に
駆出で、入道が知らせ故時政直に向うた
り。覺悟せよ宇治の方と。地いふ間もあら
せず胸板へ。發止と響く筒音に脆くも息
は絶果てたり。三浦ヤアお騒ぎあるな宇
治の御方。斯くあらん事を察し。詰り詰り
に守護する高綱。入道めが悪工いかなる
事も計られず。奥へ／＼と勧めやり。地
高綱勇んで大音上げ。鎌倉の大將。北
條時政を佐々木の四郎が討取つたりと高
らかに呼はれば。頼家主人の敵逆さじと
拔連れ／＼切つてかゝる。三浦ヤアこと
ごとき難兵ばら。一々此世の暇をくれ
んと。地群がる中へ割つて入り。殖立て殖
立て切捲くる。その太刀風に木葉武士。
むら／＼ばつと逸散れば。佐々木も上帯
しめ直し。太刀のほめきを冷さんと縁側

に突立つ折から。矢一つ來つて高綱が肝
のたばねにかつきと立てば。うんとはか
りにどどう伏し。フシ果なく息は絶果て
たり。三浦誰が仕業とも白書院。弓矢拂へ
悠々と入來る北條時政。これ迄數度の
戦ひに佐々木めにたばかれし其返報。
稻毛の前司某によく似たるを幸ひ。我が
妾に出立たせ佐々木めに宛ひし故。誠と
思ひ本體を現はせし狼狽者。和田三浦は
先だつて入道が謀計に死したる由。稻毛
が咄に聞きたれば最早高綱唯一人と思ひ
の外。我が矢先に最期を遂げし誠の佐々
木。今は大將一本立。ヤア／＼頼家は何
所にある。時政直に見参せんと。地呼はり
／＼、フシ奥の方。のさ／＼歩む耳元へ又
もどつさり種が島。吃驚仰天返るお花
畑の鳥おどし。衆袋笠取つて高笑ひ。三
ハ、ハ、ハ、イヤお騒ぎあるな時政公。近
江源氏の嫡流佐々木四郎左衛門高綱。そ

れへ參つて御見参仕らんと。三浦地呼はる
聲に、フシ流星の。時政仰天あり。稻毛の
前司に勧められ。深々と入來り又も佐々
木が術に乗りしか。思へば無念と引返す
れば。此方より三浦之助長柄の銚子拂
へ出で。只今城外に於て頼家公實朝公
御兄弟御對面の上。五に和睦相調ふと。
地いふに和田兵衛引取つて。兩將御
心解合ふからは。時政公にも異議あるま
じ。御悅の御盃頂戴あれと詞の下。地
佐々木四郎遙に手をつき。某方寸の謀
を以て。時政公を城内へ引入れしも。御
和睦を調へん爲。君御一人の御心にて萬
民塗炭の苦を逃る。御承引下さらば敵對
申せし我々。御刑罰にあふとも。聊か
恨と存ぜずと。三浦地詞をつくし理をせめ
て。命惜まぬ三人が。三浦忠義を感じて時
政公。同ホ、適れるなる忠臣義士。實朝公

御許容の上は。某に何の野心。和睦は願ふ所ぞと。ま強^地詞に三人飛立つ悦び勇み立つたる折からに。軍軍勢引連れ大江の入道。餘すまじとて追取^ち卷く。詞詞ヤア物々しやと三人が。抜放したる太刀風に^地恐れて近寄る。フシ者もなく。地入道一人を引^引挟み。詞詞これまで工^まみし悪の報い思ひ知れと首打落し。地地悦び勇む和田三浦。佐々木が家の四つ目^目結。その結び目は代代までも。解けず。治まる秋津國榮えの。春ぞめでたけれ

明和六己丑年

十二月九日 近松半二

八民平七

作者

三好松洛

竹本三郎兵衛